Rozen Maiden　alice wrestling

Chihaku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｒｏｚｅｎ　Ｍａｉｄｅｎ　ａｌｉｃｅ　ｗｒｅｓｔｌｉｎｇ

【Ｎコード】

Ｎ８９９２Ｃ

【作者名】

Ｃｈｉｈａｋｕ

【あらすじ】

薔薇水晶、水銀燈との戦いから約一ヶ月・・・ローゼンメイデン第五ドール、真紅はいつもと変わらない日常をマスターであるジュンと過ごしていた。・・・唯一変わったことと言えば、ある漫画にはまってしまったことだけだ（ちなみに今ローゼンメイデンの中でブーム）。あの戦いでお父様から伝えられた「もう一度アリスを目指しなさい・・・でも、アリスゲームだけが、アリスになる方法じゃない」という言葉の意味を考えつつ、ひょんなことからアリスレスリング（以下アリレス）を開催することに決定する。しかし、単

なるお遊びのつもりが、次第にローゼンメイデン全員を巻き込むさらなる戦いに発展することになるのだった。

第一回　前半（前書き）

ローゼンメイデンのドールズ達が超人レスリングをしたら・・・という妄想で書き殴った作品です。ローゼンとキン肉マンのパロディ小説となっております。

ローゼンメイデンの登場人物ばかり出てくるので、ローゼン分かるけどキン肉マンは・・・って人でも十分理解できます。（その逆は結構つらいけど）

アニメ・ローゼンメイデンのネタバレが含まれますので気をつけてください。

同じく、キン肉マンおよびキン肉マン二世のネタバレも（一部分）含まれますのでご注意を。

Ｒｏｚｅｎ　Ｍａｉｄｅｎ　ａｌｉｃｅ　ｗｒｅｓｔｌｉｎｇ（略してアリレス）における戦いは、おもに（キン肉マンの）超人レスリングを参考にしています。プロレスとは全然違うのでご了承をお願いします。

第一回　前半

開幕、アリスレスリング！の巻　　前半

真「お父様はおっしゃったわ。もう一度アリスを目指しなさいと・・・でも、アリスゲームだけが、アリスになる方法じゃない」

ジ「真紅・・・」

真「だから・・・ローゼンメイデンによるレスリング・・・その名もアリスレスリングを始めるのだわ！」

ジ「・・・え？」

真「ちょっと、翠星石達に話してくるわ」

バタンッ

ジ「もしかして、漫画の影響じゃ・・・」

正午　ジュンの部屋

真「・・・ということで、日頃の運動不足を解消するため、いわば競技として行うことにしたのだわ」

翠「・・・まあ、最近暇でしゃーねぇですからね。翠星石は別にかまいませんですよ」

金「ふふふーん♪勝負は頭のよさで決まるってことを教えてあげる

のかしら～」

水「ふふふ、最近暇だし真紅をからかいにきたわぁ・・・」

水銀燈、窓からジュンの部屋をのぞく

水「さて、どうやって驚かそうかしら・・・ん？」

翠「それで・・・もちろん優勝したあかつきには、何かご褒美があるですよねぇ真紅？」

真「アリスレスリングは模擬アリスゲームみたいなものだから、優勝者はアリスにもっとも近いことが証明されるわ」

水「・・・アリスにもっとも近いことが証明されるですってぇ！？」

翠「んー・・・なんかもっとこう・・・形のあるご褒美みたいなのはないのですかぁ？」

金「同感なのかしらぁ～。結構危険そうだし・・・それなりの代償は欲しいのかしら」

真「ふふふ・・・そう言うと思って・・・」

真紅、くんくん姿が載っている雑誌を見せる

真「なんと優勝賞品は・・・このくんくん探偵グッズ2よ！」

翠&金「なっなんだってー！」

水「優勝賞品がくんくんの愛用している探偵服ですってぇ／／　／／」

翠「たしか、それは懸賞でしか手に入らない幻のグッズじゃないですか？」

真「それは・・・先日、あなたたち二人がみっちゃんさんのお宅に遊びに行っているとき・・・」

回想

ジ「へえ・・・テレビでやってたくんくん探偵グッズセカンドがもう競売にかけられてる。抽選でしか手に入らない物だから値段はどんどんあがっていくだろなぁ」

真「（ピクッ）くんくん探偵グッズセカンド？」（本を読んでる）

ジ「最近は、こうやって競売の駆け引きを見るのが楽しくなってきたな・・・あの金糸雀のマスターじゃないけど。」

ジ「今は5万か。そろそろ入札終了時刻だな・・・そうだ！」

ジュン、入札金10万と設定し”入札”のボタンの上にカーソルを持ってくる

ジ「もし、万が一左指に力が入りクリックしてしまったら・・・くぅぅぅぅ！いいねぇ！このスリル！・・・ぶるる、トイレに行きたくなった」

バタン

真「・・・（パタン）」

真紅、パソコンの前に上る

真「ジュンは「万が一左指に力が入りクリックしてしまったら」と言ったことから推測するに・・・（カチッ）　よし、これで探偵グッズは私の元に・・・」

真「でも、このままだとジュンにばれてしまうのだわ。・・・そうだわ！」

真紅、パソコンのコンセントを一度抜き、もう一度指す

真「これでよし！あとは・・・」

ジ「ふう～スッキリしたぁ・・・」

ドン！ドン！バタン！パリーン！

ジ「なっなんだー！？上で大きな音が！」

急いで階段を上りドアを開ける

ジ「どうした！真紅！」

真「あっ・・・ジュン」

ジ「うっ部屋がメチャクチャに・・・」

真「・・・水銀燈がパソコンの画面から出てきて部屋をメチャクチ

ャにしていったのだわ」

ジ「アイツが！？最近おとなしくなったと思ったらー」

真「・・・ごめんなさいジュン」

ジ「！？どっどうしたんだよ真紅・・・別にお前は悪くないだろ」

真「・・・でも、彼女を止めることはできなかったわ。」

ジ「そっそんなに気にするなって」

真「・・・そういえば、パソコンにもいろいろといたずらされたみたいだわ。貴方の大切な物なのに・・・面目ないわ」

ジ「しょうがないだろ？翠星石達がいなかったのも運が悪かったし・・・それに・・・」

ジ「（小声で）・・・お前が無事でよかったよ／／　／／」

真「え？」

ジ「とっとにかく、ボクは今からパソコンの調子を見るから／／／／」

真「ありがとうジュン・・・。そうだ、のりからおやつをもらってくるのだわ。」

ガチャ、パタン（ドアを開けて閉める）

真「計画通り！」

真「これで、商品が届いたとき、水銀燈がやったとなすりつけられるのだわ！」

ジ「よし！どうやら強制終了されただけみたいだな。・・・それにしても、いつも黒い羽をまき散らすのに、今回はやけにきれいだな」

真「・・・」

真「・・・となんとか誤魔化して買わせたのだわ」

金「さっ流石真紅かしら」

翠「私たちがやれないことを平然とやってのける・・・ある意味そこにしびれるですぅ（あこがれないですけど言ってみたかったです）」

金「でも、よくそんな悪知恵が働くのかしら」

翠「たしかに・・・たまに真紅はびっくりするような悪知恵を働かすですねぇ。まあ、良い言い方をすれば頭が良いわけなんですが。なんか理由でもあるですか？」

真「そっそれは・・・」

ガチャン

水銀燈、犬がうなるような声で

水「しぃ～ん～くぅ～！！」

真&金&翠「すっ水銀燈！？」

水「しんくぅ～、よくも・・・よくも私に無実の罪をきせてくれたわねぇ」

真「ううっ・・・」

水「どうつぐなってくれるのかしらぁ？」

金「こっこれはかなりやばいシチュエーションなのかしら・・・」

翠「どうするですか、真紅？」

真「・・・ふんっ。何を言い出すかと思ったら・・・」

水&翠&金「！？」

水「なんですってぇ？」

真「よく考えてみなさい、水銀燈。何故、ジュンが私の話を疑わなかったか」

水「そっそれは・・・」

真「貴方の普段の行いが悪いからではなくて？」

水「な！なによー！最近はそんなことしてないわぁ！！」

真「・・・最近やったかやってないか、そんなことは関係無いのだわ。やったという事実は変わらないのだから。それに、盗み聞きはどうかと思うけど」

水「き・・・きぃぃぃ！」

翠「ひっひらきなおりやがったですぅ・・・」

金「まさに真紅・・・なのかしら」

水「ふっふふふふふふふ・・・。いいわぁ・・・ちょうど良い舞台があるわぁ」

真「？」

水「貴方たち、模擬アリスゲーム・・・とかなんとか話してたわよねぇ？」

金「そういえば、その話から真紅の回想まで話が飛んだのかしら」

翠「・・・まさか」

水「当然、私も参加するわぁ！」

真（くっ・・・やはり）

水「そして真紅・・・あなたにさっきの借りを返してあげるわぁ！それに・・・その戦いの頂点に立つことは、同時にアリスにもっとも近いことが証明されることになるのだから！」

金「すっ水銀燈も参加するのかしらぁ！」

翠「でっでもでも、今回のはただの遊びですしぃ。優勝してもくんくんの探偵セット2しかもらえんですよ？水銀燈は、別にもらってもうれしくないと思うですぅ」

水「だっだまりなさい！たったしかにそんなの別に欲しくもなんとも無いけど・・・そうやって私をのけ者にするのは許さないわぁ！」

真（まさか水銀燈が参加するとは・・・いや、むしろ好都合と考えるべきなのだわ）

真「勿論、貴方も参加資格はあるのだわ。むしろ、参加人数が増えて嬉しいわ」

金糸雀と翠星石が小声で会話

金「真紅ったら許可しちゃったのかしら・・・ちゃんとルールを守ってくれるのなら、少しは安全なんだけれど」

翠「水銀燈の場合、「ルールは破るためにあるぅ」とか言いそうですね」

水「・・・うふふ、それでいいのよ真紅ぅ。たっぷりと楽しませてもらうわぁ」

真「ただし、参加する上で一つ」

水「ん？」

真「アリレスには守るべきルールが存在する。そのルールには従ってもらうわ、誇り高きローゼンメイデンであるならば、守れるわよね？」

水「もちろんじゃなぁい。私を誰だと思っているの？アリスに最も近い存在・・・水銀燈よ。ルールなんていくらでも守ってあげるわぁ」

真「流石水銀燈・・・その言葉、忘れないでね」

翠（流石なのは真紅ですぅ・・・簡単にルールを守ることを約束させちまったですぅ）

真「それでは、翠星石、金糸雀にはすでに説明したけど・・・もう一度ルールの確認をするのだわ」

人工精霊は使えない

それ故、人工精霊を媒介にして出現させる武器、道具などは使うことが出来ない

（水銀燈の剣、庭師の如雨露、鋏など）

しかし、ドールの持つ能力なら反則にはならない

（水銀燈の羽、真紅の花びらなど）

戦いの場は、つねにリングの中

相手をギブアップ、または失神、戦意喪失させたら勝ち

基本的に、相手を壊してはいけない

ローゼンメイデンの誇りを持って戦うこと

真「まあこれくらいね。また増えるかもしれないけど・・・」

水「なんだぁ人工精霊を使ってはいけないこと以外アリスゲームと変わらないじゃない」

金「あっ相手を壊してはいけないってのがポイントなのかしらー」

翠「・・・なんかですねぇ、このルール翠星石には不利な気がするのは気のせいですか？」

水「ドールの持つ能力　ってところね？まあ、恨むなら無能な己を恨みなさぁーい。フフフ」

カチーン

翠「今の言葉聞き捨てにならんですよ！水銀燈！」

水「あらぁ～、本当のことといってごめんなさぁい」

翠「なっ・・・むきぃいい！もう許せんですぅ！」

水銀燈と翠星石がにらみ合っている

金「ちょ・・・ちょっと、やめるのかしら～」

真（・・・そうだわ）

真「なら、ちょうどいいのだわ。今大会の試合方式はトーナメントよ！」

金「たしかにそれが一番簡単なのかしら」

真「そして、第一回戦は・・・翠星石ＶＳ水銀燈　！」

二人、声をそろえて

翠＆水「異議なし！！」

金「すっすごい気迫なのかしら・・・」

翠「水銀燈・・・こんなこと言いたくないですが、お前が蒼星石にやった仕打ち、許したわけではないですよ！」

水「・・・結構よ、許してもらわなくても」

翠「（ぐむむぅ・・・翠星石は・・・翠星石は復讐なんてしたくはないのにぃ！でも、水銀燈、おまえの態度を見ていると一発ぶん殴りたくなってきたですぅ！）」

真「アリスレスリングは２４時間後、場所はｎのフィールドに専用のリングを用意するから、そこで第一回戦を始めるのだわ。」

水銀燈、去り際に

水「ふんっ、せいぜい逃げ出さないことね弱虫ちゃん」

翠「それは、こっちの台詞だこんちくしょー！ですぅ！」

水銀燈去ってから

翠「・・・えらいことになっちまったですぅ」

真「大丈夫よ、万が一の時は私たちがＴＫＯ（テクニカルノックアウト）を宣告し、試合を止めるから」

金「そっそうなのかしらー、それに流石の水銀燈も本気の本気は出さないと思うかしら」

翠「はあ・・・、まー決まったもんはしゃーねーですから、試合の時まで出来ることはやっとくですぅ。真紅、アレを貸して欲しいですぅ」

真「勿論よ。」

そういって、何冊かの漫画を翠星石に手渡す

翠「ありがとです真紅ぅ。それでは翠星石はこれからイメージトレーニングするので、一人にさせて欲しいですぅ。」

真「それでは、居間にでも行っているのだわ」

金「そういえば、真紅。残った私たちはどうするのかしら？」

真「もちろん、第二回戦は真紅ＶＳ金糸雀よ。第一回戦の翌日に始めるわ」

金「やっやっぱりそうなるのね。・・・真紅、かなにもこの漫画を貸して欲しいのかしら。ええと、こういうことをたしか・・・そうっ、敵に砂糖をおくるっていうかしら」

真「砂糖ではなく、塩ね。勿論かまわないわ、良い試合をしましょう、金糸雀」

金糸雀は、数冊の漫画を持って、窓から帰って行った

真「それでは、がんばって翠星石」

バタン

真紅、階段をおり、ソファーに座りテレビをつける

真「・・・ふふっ、優勝はもらったのだわ」

真紅、周りに誰もいないのを確認して服に隠していた金色のマスクを手に取りながら

真「全ては計算通り・・・。トーナメント一回戦で両者が戦うことでお互いのもつ技、戦法などのデータが入るわ。」

真「それに、水銀燈、翠星石のどちらともが要注意人物。その二人が戦えば、どっちが勝っても、無傷ではすまない。

真「それに対して、私の対戦相手は金糸雀。特に注意することも無

い。」

真紅、金色のマスクをかける

真「これで、くんくん探偵グッズセカンドはもらったのだわ！ふふふ・・・あっはっはっはっは！」

第一回　後半

開幕、アリスレスリング！の巻　　後半

同日　同時刻　巴宅

ジ「それじゃあ」

巴「ありがとう、桜田くん。一週間たったら返しにいくから・・・」

ジ「別に・・・そいつも柏葉の側にいたいだろうし、もっと長くても」

ジュンは、巴の胸に抱かれている雛苺を見つめながら答える

巴「（首をふって）ううん、雛苺はいろんな人の側にいたいと思うの。だから・・・」

ジ「そっそうか・・・じゃあ、よろしく」

バタン

巴「・・・ありがとう、桜田くん」

巴「・・・早速髪をといてあげるね」

巴「・・・はやく、目を覚ますと良いね、雛苺。」

同日　午後９時

巴、雛苺を横に置いて勉強中

巴「はっ、もうこんな時間。明日は朝練だから早く寝ないと・・・」

雛苺の鞄を開けて、その中に雛苺を寝かせる

巴「それじゃあお休みなさい、また明日・・・」

パタン

カチッ

巴、部屋の電気を消し、自分の寝室へ向かう

？「・・・」

カチッ

パカッ

？「・・・見つけた・・・ローゼンメイデン第六ドール、雛苺」

？「ふふふ・・・あっ・・・」

？「・・・ばごあ・・・ばごあ」

同日　同時刻　桜田家

真「もう9時を回ってしまったわ。翠星石も、明日の試合のため早

く寝なさい」

翠「分かってるですぅ」

真「それでは、先に寝るわ。お休みなさい」

バタンッ

翠「おやすみなさいですぅ」

翠「・・・よいしょっと」

パカッ

翠星石、自分の隣にある鞄を開ける

その中には、まるで眠っているように動かない蒼星石がいる

翠「・・・姉ちゃんは、明日水銀燈と決闘するです！だから、蒼星石も応援して欲しいですよ！」

翠「・・・でも、実のところ水銀燈のことを恨んでるわけではないのですよ。そりゃあ、お前をこんなことにされて悔しいし、つらいですけど・・・」

翠星石、一瞬間をおいて

翠「でも、だからといって復讐をすることは、翠星石は好きじゃないんですよ・・・。水銀燈が一言謝ってくれればすぐに許しちゃうかもしれないです。」

翠「そんな翠星石を蒼星石はどう思うですか？」

翠「こんなことを思うのは、水銀燈の言うとおり、翠星石が弱虫だからかもしれないですね。でも、蒼星石なら翠星石の気持ちを理解してくれると思うですぅ。

翠星石、蒼星石の髪をなでながら

翠「だって、お前は私の双子の妹だから・・・・」

髪をなでながら、翠星石は蒼星石とすごした日々を思い出す

翠「明日、がんばって水銀燈と話し合ってみるですぅ。そっちの方も応援して欲しいですよ。それじゃあ、おやすみ・・・良い夢を・・・」

パタンッ

カチッ

翠星石、自分の鞄に入る

？「・・・」

？「・・・すい・・・せい・・・せ・・・き」

同日　同時刻　病院

め「そろそろ消灯時間ね。ねえ、水銀燈？そろそろ入っておいで」

水「・・・」

水銀燈、黙ったまま窓からめぐの病室に入る

め「今日、姉妹達のところへ行ったんでしょ？お話・・・聞かせてくれない？」

水「・・・別に貴方に聞かすことなんてないわ。ただ、アリスゲームに似たことをすることが決まっただけよ・・・」

め「それは、また姉妹同士壊しあうということ？」

水「・・・それは・・・ないわ。今は別にローザミスティカなんていらないし・・・それに・・・」

め「それに？」

水「・・・何でもないわ」

水（私にも聞こえた・・・お父様の声、もう一度アリスを目指しなさい・・・でも、アリスゲームだけが、アリスになる方法じゃない・・・と）

水（けど、それが何なのかは分からない・・・お父様は何を伝えたかったの・・・）

めぐ、わざと話題をそらし

め「じゃあ、ある種競技みたいなことをするのかしら？」

水「たしか、れすりんぐとか何とか真紅が言っていたわね」

め「あら！もしかしてプロレスのことかしら！私、プロレス大好きなのよ。いつもテレビで見てるのよ」

水「あっそ・・・まあ、この私はどんな方法の戦いでも負けるはずはないわ」

パカッ

水銀燈、鞄を開ける

め「あら、水銀燈もう寝るの？よかったら教えてあげようか？技とか」

水「ぷっ・・・あはははは！病人で弱々しい貴方から教えてもらうことなんて無いわよぅ。気持ちだけ受け取っておくわ。それじゃあ、お休みなさい。」

バタン

め「お休みなさい、水銀燈。」

め「・・・大丈夫かな？レスリングのこと、あんまり知ってなさそうだったけど」

同日　同時刻　草笛みつ宅

み「カナー！今帰ったよー♪　・・・って寝ちゃってるか」

金糸雀、本を下敷きに居眠りをしている

み「カナの本じゃないみたいだけど、よだれでよごれちゃってるわね・・・大丈夫なのかな？」

同日　？時刻　nのフィールド

？「はじまる・・・はじまる・・・ローゼンメイデンの姉妹がついにそろう・・・」

？「そして・・・私の夢は叶うのです。」

？、後ろを向く

？「わたしの為に手伝ってね♪」

？の目を向けた先には3つのシルエット

シルエットA，B，C「・・・」

？「ばごあ・・・ばごあ・・・いいことを考えたわ。貴方たちのグループ名を決めなくちゃね♪」

？「本当は4人いるからぁ、貴方たちは・・・薔薇の四人組。いや・・・四天王の方が格好が良いかしらねぇ・・・」

A「そんなこと、どっちでもいいわ！それより、約束は守って下さるのでしょうね！？」

？「んー・・・そうねぇ、やっぱり四天王の方が響きが・・・」

B「こら！ちゃんときいてんの！？」

？「（ギロッ）・・・口の聞き方に気をつけなさい」

A&B「うっ・・・」

C「・・・」

？「・・・ぷっ・・・あっはっは・・・じゃなくて・・・ばごあ、ばごあ・・・。冗談よ冗談♪」

？「大丈夫、約束は必ず守るわよ。それより、私にもかっこいい強そうな名前が欲しいわねぇ・・・。」

？「そう、私のもう一つの名前・・・薔薇のように優雅であり・・・貴方たちの将軍・・・。そうっ、私の名前は薔薇将軍！」

A&B「（思いっきりそのまんまでしょ・・・）」

ここで、初めてCが喋る

C「あの・・・お姉サマは？」

A「そう、そのことも気になっていたのですわ」

B「そうそうっ、姉サマは何処にいったん？」

将「ばごあばごあ、彼女なら・・・私たちのお友達を増やしに行っ

たのよー。ばごあばごあ」

A「（どうでもいいけど、あの笑い方・・・無理があるんじゃなくて？）」

B「（あんま下手に突っ込まへんほうがええよ）」

C「・・・お姉サマ」

将「ばごあばごあ・・・ついに私の夢がかなうのですね。・・・さあ、アリスレスリングを開幕しなさい・・・蒼白き脳細胞を持つ、紅のお姉様・・・」

かくして、運命の歯車はそろい　アリスレスリングへの開幕へと廻りだした・・・

勝利を手にするのはどのドールか！？

また、薔薇将軍と名のる謎のドールと四天王の存在は！？

アリスゲーム以外にアリスになる方法とは！？

全ての謎を抱え、今、アリスレスリングの幕が開かれる！！！！

第二回～第五回（前書き）

水銀燈　ＶＳ　翠星石編

第二回～第五回

第二回　水銀燈ＶＳ翠星石　の巻！

第一回戦　開始時刻

Ｎのフィールドに設けられた特設リング

青コーナーには既に水銀燈の姿が

水「このローゼンメイデンの中で最もアリスに近いこの私を待たせるなんて・・・いい度胸してるじゃな～い」

トーナメント第一回戦、水銀燈ＶＳ翠星石の試合が行われようとしていたが・・・

試合開始時間になっても一向に姿を現さない翠星石に、水銀燈はあきれ顔

水「ちょっと、真紅とそのミーディアム、あの臆病者はどうしたっていうの？まさか、本当にびびって逃げ出したんじゃないでしょうね？」

リングの前にある解説席では、無理矢理連れてこられたジュンと、興味があるのでみたいという巴、真紅、金糸雀の４人が座っている

ジ「おかしいなぁ、今日の朝は『打倒、水銀燈ですぅ』とかわめいていたんだけどなぁ」

真「彼女が逃げるなんて・・・考えられないわ」

水「いいわ、後5分だけ待ってあげる。それでも来なかったら、レフェリー、翠星石の試合放棄として私の勝ちを宣告しなさい」

と、ジュンをにらみつける

ジ「え？ぼく？（・・・勝手にレフェリーにされてしまった）」

金「翠星石どうしちゃったのかしら・・・ちょっと様子を見てくるかしら」

金糸雀、選手控え室に向かっていった

真「・・・（深刻そうな顔つき）」

それを見たジュンは

ジ「大丈夫だって、あいつは必ず来るよ」

真「ええ・・・私たちに出来ることは信じることだけなのだわ」

真（不戦勝なんてことになったら・・・データはおろか水銀燈は万全の状態で・・・いったい翠星石は何をしているの！？）

それから5分後

水「・・・レフェリー、時間は？」

ジ「・・・5、4、3、2、1・・・くそっ、約束の時間だ」

水銀燈、ため息混じりに

水「まさか、本当に逃げ出すとわねぇ・・・ローゼンメイデンの恥だわぁ。さあ、レフェリー約束通り私の勝ちを宣告・・・」

その瞬間！

？「誰が逃げたですって？」

銀「誰！？」

そう水銀燈が叫んだとたん、素早い影がリングの中に入り、彼女の背中にドロップキックを放った

銀「きゃあっ」

？「これは、私をローゼンメイデンの恥と罵ってくれたお礼です」

突然の出現に一同驚く　その正体は・・・

真「あの、服、体型、長い髪、口調・・・」

ジ「翠・・・星石？」

その影の正体は、いつも通りの翠星石だった！只、頭にかぶっている緑のヘルメットを除けば・・・。

第三回　　ついに開始、因縁対決！の巻

突然の攻撃に膝をついた水銀燈

水「遅れてきたにもかかわらず、背後から蹴りとは・・・随分卑怯なことやってくれるじゃなーい。翠星石！」

水銀燈が不気味な笑みをつくりながら起き上がり、翠星石をにらみつける

翠「・・・遅刻したことは謝るです。でも、水銀燈・・・お前に卑怯と言われたくはないです」

ヘルメットの影のせいで翠星石の眼が見えないが、おそらくい水銀燈をにらみつけ返している

翠星石の突然な登場に呆気にとられているジュン。そんなジュンに

真「何をやってるのジュン！？はやく、ゴングをならしなさい！」

ジ「へ？ご・・・ごんぐ？」

カーーーーーンッ！

１２時５分　水銀燈　ＶＳ　翠星石　開始

パニック状態のジュンにかわり、隣に座っていた巴が勢いよくゴングをたたいた

真「・・・まったく、使えないしもべね」

ゴングが鳴ってから、最初に口を開いたのは水銀燈だった

水「その似合わないヘルメットは何？そんなに私の攻撃がこわいのぉ？クスクス」

翠「・・・・・」

水「うふふ、大丈夫よぉ。いくら叩いても、もうそれ以上おばかさんにはならないと思うからぁ」

翠「ピーチクパーチクうるさいですね。そんなに怖いなら翠星石から行ってあげるですよ。」

ジ「流石口悪性悪人形。口だけは水銀燈にひけをとらないな・・・」

真「問題は、あの水銀燈相手にどう戦うかだわ」

水「威勢がいいのは結構だけどぉ。うふふ・・・すぐに泣き虫に戻してあげるわぁ」

そういうと、水銀燈は翠星石に向かって走り出し、つかみかかろうとしてきた

しかし、翠星石はしゃがみ込んで手をよけ、水銀燈の片足をつかみ、体全体を使って回転するように思いっきり刈り込んだ

その見事な技に、一同は驚き

ジ「え？な、なんで二人とも回転したんだ？」

真「あの技は・・・」

巴「ドラゴンスクリュー！」巴が真紅より早く叫んだ

ジ「ドラゴンスクリュー？あの技の名前？」

巴、こくりとうなずく　翠星石の美技にかなり興奮している

真「・・・巴、以外と詳しいのね」

一番驚いたのは水銀燈だ　いつのまにか自分がマットの上にうつぶせになっていたのだから

水「なっ・・・なにが起こったというの？なぜこの私がマットにうつぶせに寝ころんでいるというのよ！？」

今一状況をよくのみこめていない水銀燈。そんな水銀燈に遠慮することなく、翠星石が水銀燈の両足を関節技にきわめていく

真「今度は」

巴「インディアンデスロック！」

真「・・・」

水「痛！・・・痛い痛い！・・・ちょっとぉ！何するのよ！真紅！？これは反則じゃないの？レフェリー！こいつを止めなさいよぉ！」

一同「・・・え？」

第四回　無知で鞭なドール！の巻

真「・・・水銀燈、貴方まさか・・・プロレスのルールを知らないの？」

水「え？」

ジ「今翠星石がかけているのはいわゆる関節技だよな？何か問題なのか？」

巴「・・・いえ、技のフォーム、足首への力加減ともすばらしいわ。強いて言うなら腰をもっと落として体重をかければ・・・」

真「水銀燈？あなた、何をするかと思って・・・」

水「うっうるさい！うるさい！」

水（くっ・・・こんなことならちゃんとめぐに聞いておけば・・・）

翠「ふんっ、ルールも分からず参加なんて、とんだ笑いもんです」

水「ぐっ・・・！」

翠「いいこと教えてやるです。『ギブアップ』って情けない声で叫んだら、この技から解放してやらないこともないですよ」

水「ふふふ・・・おばかさぁん！この水銀燈にギブアップの文字はないわぁ！・・・ぐっ！」

翠「・・・やっぱりそう言うと思った、で、す！」

そうしゃべり終えると同時に、足首をしめる力をあげていく

真「・・・何かしら、この違和感は」

ジ「どうしたんだ真紅？翠星石が有利なんだぞ？」

真「・・・そうだわね」

水「ぐっ・・・うふふ・・・あっはっはっは！」

翠「！？」

水「調子にぃ・・・のるんじゃ・・・ないわよ！！！」

水銀燈の背中にある黒い羽が伸びていく

水「くらいなさい！」

そういって、インディアンデスロックをきわめていた翠星石の背中に思い切り羽をたたきつける

翠「きゃあ！」

翠星石、ロープ際まで吹っ飛ばされる

巴「あっーーーと！ここでようやく水銀燈の反撃！ブラックウィングだぁー！！」

真（実況！？）

ジ「へぇー、あの水銀燈の技ってブラックウィングっていうんだ」

少しの沈黙のあと、巴が恥ずかしそうに

巴「ううん、今とっさに考えたの・・・／／　／／」

ジ「えっ、そ・・・そうなんだぁー」

真「・・・巴、恐ろしい子」

水「そんな地味～な技、私には通用しないわよー。そぉ～れ！そぉ～れ！」

水銀燈、自分の羽を鞭のように使うことで、翠星石を近づけさせないようにしている

巴「あっーーーと！水銀燈、ブラックウィングを使って翠星石を寄せ付けていない！この技をどう思いますか、桜田さん？」

ジ「え？ぼぼぼく？えっえーと・・・かっこいいかも」

真「一見ワンパターンなだけに見えるこの技だけど・・・攻撃だけでなく、翠星石を近づけさせない防御の面でも役割を果たしている」

真「過去に私を苦しめただけある、とても効果的な技だわ。一気に攻守逆転したわね・・・」

巴「なるほど、解説ありがとうございました真紅さん。このブラックウィップ、いつまで続くのでしょうか」

ジ（・・・また考えだしたのか）

真「私のローズウィップとかぶるのだわ」

水（最初からこうすれば良かったのね）

水「ほぅらぁ、どうしたの？翠星石ちゃん。泣きながら『ギブアップ』って叫んだら止めてあげないこともないわよぉ」

鞭を避け続けていた翠星石　しかし、疲れたのか片膝をつき止まってしまった

そのチャンスを逃すはずのない水銀燈

黒い羽の右翼が、翠星石の左手に巻き付く

水「つかまえたぁ♪」

巴「あっーーーと！翠星石、ついに捕まってしまったー！」

真「これは危険なのだわ・・・あの羽にからみつかれては、はずずことは難しい・・・」

ジ「真紅・・・」

真紅は左手で右肩をさすりながら言った

真「・・・もし、水銀燈が私にやったことと同じことをしそうになったら・・・分かってるわね？ジュン」

ジ「うん、分かってる」

真（ジャンクになる恐ろしさは貴方が一番知っているはず・・・水銀燈）

左手をつかまれた翠星石、身動きせずにじっとしている　いや、口だけがかすかに動いている　何かをつぶやいているように・・・

水（抵抗すらしないなんて・・・まあいいわ両手を封じてギブアップさせてやる）

水「さあ！今度は左手よぉー！」

左手を捕まれているので、逃げ出すことが出来ない

水銀燈の左翼が翠星石の右手につかみかかろうとしたその瞬間！！

翠「ベルリンの赤い雨ぇ！！」

ズサー！！

バサリッ・・・

その場にいた者には、いったい何が起こったのかすぐには分からなかった

ただ、翠星石の右手だけが赤く炎に包まれ・・・燃えていた

その短い沈黙を破ったのは、巴の声だった

巴「あっーーーと！水銀燈の左翼が切断されたぁーっ！！」

第五回　燃ゆる右手！の巻

翠「ベルリンの赤い雨ぇ！！」

その叫びとともに、翠星石の右手が真っ赤に燃え、つかみかかろうとした左翼を切断した

銀「な・・・なんですってぇ！」

突如燃えだし、自分の左翼を切断されたことにおどろきを隠せない水銀燈

それは、真紅達も同じであった

真「そっそんな・・・あの技は・・・」

ジ「あ・・・あれってルール上ＯＫなのか？真紅」

真「アリレスのルールでは、凶器の使用は認められていない。例えば、庭師の如雨露、鋏、水銀燈の剣などね。でも、あらかじめ自分の持つ能力や、体の一部を変化させての攻撃は合法なのだわ。」

真「おそらく、彼女は自分に右手を刃物のようなものに変化させ、炎をまとわせることで切れ味をあげているのだわ」

ジ「そうかぁ・・・なるほど。でも、あいつあんなことできたかな？」

真（”ベルリンの赤い雨”たしかに彼女はそう言った・・・とすると、私と同じく何らかのアレを持っているはず・・）

翠「何間抜け面してるですか？今度はこっちの羽ですよ！ベルリンの赤い雨ぇ！」

翠星石は、自分の左腕にからみついている右翼に向かってベル赤をくりだした

水「ちっ」

それをいち早く察知した水銀燈　間一髪、羽を翠星石の左腕からほどき逃がす

翠「あのときと同じく、また翼を切断されるとは、何とも皮肉ですね！」

水銀燈、真紅達と戦ったときのことを思い出しながら

水「生意気な口を！（自分がやったわけでもないくせに）」

巴「さあ、一進一退の攻防が続いているこの勝負、どちらが勝つのであろうか、まったく予想できません！」

ジ「意外にやるなぁ翠星石。これは勝てるかもしれないぞ、なあ真紅、真紅？」

真「・・・ええ」

翠「今度はまた・・・一刀両断にしてあげるっです！！」

水「くっ！」

翠星石、間合いをつめようと水銀燈に近づく

一方、そうはさせないと自慢の長い足でやくざキックをはなつが・・・

翠「その片足・・・待ってたですよ！」

翠星石、素早く水銀燈の背後に回る

そして、水銀燈に片足を上げさせたまま、なおも両腕を交差させてかんじがらめにする

水「うっ動けない・・・」

そのまま、水銀燈をスープレックスで投げる

翠「くらえ！ビーフケーク・ハマー！！」

ドゴーン！

水「ぐふっ！！」

巴「あーーーと！変則型のスープレックス・・・ビーフケーク・ハマーだぁ！！水銀燈、頭を強打したぁー！」

真「ま・・・また・・・」

ジ「すごい・・・翠星石がおしている」

翠星石、頭を抱えて寝転がっている水銀燈に近づく

翠「・・・ベルリンの赤い雨！」

翠星石の右手に炎がともる

真「！？」

ジ「どっどうするつもりだ？」

真「まさか、あの右手を水銀燈に突き刺す気じゃ！？」

翠「・・・くらえ！」

水銀燈の腹めがけて、右手を突き刺そうとした瞬間・・・

？「その勝負、待ちやがれぇー！！ですぅ！」

一同「！？」

一同、その声がする方に眼を向けた

その正体は・・・なっなんと！？

ジ&真「す・・・翠星石ぃ！？」

巴「あーーーーと！突如現れた人物は、またしても翠星石だー！」

第六回～第九回

第六回　二人の翠星石！の巻！

真紅達の座っている遙か後ろ、選手控え室のある花道から二人目の翠星石はやってきた

よく見ると、翠星石の様子を見に行くと言っていなくなっていた金糸雀も一緒だった

ジ「す・・・翠星石だよな？でも、お前その格好はどうしたんだ？」

なんと、翠星石は下着姿だったのだ

翠「何者かに気絶させられて・・・金糸雀が起こしてくれたときには、この姿だったです」

翠星石、悔しそうに語る

翠「あのとき、油断さえしていなければぁ～・・・」

真「・・・とにかく、あなたは本物の翠星石のようね」

ジ「どっどうしてそう言い切れるんだ？こういっちゃあ何だけど、どっちもあやしいぞ？」

翠「な・・・なにをいいやがるかこのチビ人間！この私が本物に決まってるでしょうが！」

真「・・・眼よ」

ジ「眼？」

真「彼女のオッドアイの眼を見ればすぐ分かるわ。・・・それに対して」

真紅、リング上に立つ偽翠星石の方に目を向ける

真「姿形は確かに翠星石と似ているわ。でも、肝心の眼が見えてないのよ。・・・その、ヘルメットの影に隠れてね！」

ジ「そっそうか・・・だからわざわざヘルメットを」

金「やっぱりこっちが本物の翠星石なのかしらー」

翠星石、ほれ見たことかと言わんばかりに

翠「ほら、チビ人間謝るなら今ですよ。特別に謝罪の言葉を聞いてやってもいいですぅ」

ジ「・・・それじゃあ、あいつはいったい？」

翠「こらぁ！無視するなですぅ！」

ジュンのすねにローキック

ジ「いて！何するんだこの性悪人形！」

真「さあ、名のりなさい！あなたはいったい誰なの？翠星石のふりをしてどうするつもり？」

偽翠「（小声で）ふふふ・・・流石、蒼白き脳細胞を持つ真紅。」

真「え？今なんて？」

ガシッ

水「うふふ・・・さっきは重い一発を頭にありがとう。お返しをしなくちゃねぇ」

水銀燈、いつの間にか復活し、背後から偽翠星石を両腕でがっしりつかんでいる

水「貴方の技のおかげで、レスリングというものが少し分かってきたわぁ～」

偽翠「・・・そりゃどうも」

水銀燈、偽翠星石を抱え込みコーナーのポストに上る

水「この子の正体・・・私がさらしてあげるわぁ！」

ジ「あ・・・あんな高いところから技を出すのか？」

水「水銀燈スープレックス！！」

ドゴンッ

水銀燈の通常より落差のあるスープレックスにより、勢いよくヘルメットがはずれる

真「・・・まあ、普通のスープレックスね」

巴「・・・フォームは特別美しくありませんでした」

ジ（水銀燈レスリング初心者なのに厳しいんだな・・・）

水銀燈、偽翠星石の髪をつかんで・・・

水「さあ、早速お目々を見せてもらおうかしら・・・な！」

ドサッ

水銀燈、驚いて手を離す

真「どうしたの？水銀燈！」

水「・・・こ・・・この子もオッドアイ。しかも・・・赤色と緑色よ！」

一同「な・・・なんですって！？」

巴「偽物だと思った、リング上にいる翠星石もまたオッドアイだったー！いったいどうなっているのかーーーっ！」

第七回　あり得ない正体！？の巻！

真「そんな・・・まさか、オッドアイまで偽装しているなんて・・・

」

ジ「・・・これでまたどっちが本物か分からなくなったな」

一同、じ～～～っと下着姿の翠星石を見る

翠「な・・・何言ってやがるですか！私が本当の翠星石ですぅ！」

水（左右反対のオッドアイ！？）

水「・・・真紅たしかにそっちの翠星石は本物の翠星石よ」

翠「！？」

翠星石、意外な人物からかばってもらいびっくりする

真「じゃあ、今貴方と戦っている方がやはり偽物だというの！？水銀燈」

水「・・・ええ、偽物であり・・・偽物ではないかもしれないわ」

真「いったいどういうこと？はっきりと答えて！」

ジ「なっ何か水銀燈の様子がおかしいな・・・」

金「あれはまるで・・・信じられないようなものでも見たかのようなのかしら」

偽翠「真紅の言うとおりだよ」

一同「！？」

先ほどから口数が減っていた疑惑の翠星石が口を開いた

しかし、さっきまでの口調、声色は変わっていた

偽翠「分かっているんでしょう、水銀燈？答えてあげなよ・・・みんなに」

水「ぐ・・・あり得ないわ・・・貴方は・・・たしかに・・・」

真「水銀燈、いったい何があり得ないというの？貴方は彼女の正体を知っているの？」

翠（水銀燈・・・苦しそうに見えるですぅ）

水「ううっ・・・あり得ない・・・あり得ないわ・・・貴方が・・・蒼星石だなんて！」

一同「そ・・・蒼星石！？」

巴「あーーーっと！今水銀燈の口から明かされた偽翠星石の正体！それはなんと・・・翠星石の双子の妹、蒼星石だったぁー！！」

蒼「クスクス・・・大正解」

バッ

着ていた服とかつらをはずす　そして、ニコリと微笑んで

蒼「みんな、久しぶり。ローゼンメイデン第四ドール、蒼星石です」

自分の服をキャッチして

翠「そ・・・そんな、本当に貴方なんですか？蒼星石・・・」

蒼星石、申し訳なさそうに

蒼「ごめんね、翠星石。勝手に服を借りちゃって・・・。できれば、洗って返したかったよ」

真「た・・・たしかに、その青い服装は蒼星石のもの。翠星石に変装できたのも、双子の妹だからたやすかったのね。」

蒼「そうなんだ、真紅。昔からお互いの物まねをして遊んでいたからね。すごく似てたでしょ？クスクス」

金「蒼星石なのかしら・・・ほ・・・本物なのかしら？」

蒼「うん、そうだよ。みんなを驚かしちゃって、ごめんね。」

蒼星石、てへっと舌を出す

真「蒼星石、貴方は何故・・・」

蒼「分かってるよ、みんなが何を一番僕に聞きたいのか・・・でも、その前に一つ僕から聞きたいことがあるんだ。・・・水銀燈に」

”水銀燈”という名前を言ったとたん、蒼星石の表情が変わった

蒼「ひどいなぁ・・・水銀燈。なんであり得ないなんて酷いこと言うんだい？何故？」

水「え？そっそれは・・・」

さっきまでのさわやかな表情な蒼星石はなかった　ただ無表情に・・・水銀燈を問い詰めていく

蒼「もう一度聞くよ？なぜ、僕がここにいることがあり得ないんだい？」

真「・・・それは」

蒼「黙って！真紅」

突然の大声に一同はびっくりした　いつも静かだった蒼星石がどなったのだからなおさらだ

蒼「・・・怒鳴ったりしてごめん。でも、僕は水銀燈に聞いているんだ。・・・ねえ？水銀燈・・・何でかな？」

先ほどまでずっと困ったような素振りを見せていた水銀燈　しかし、突然笑いだし

水「忘れちゃったのぉー？蒼星石ぃ？」

蒼「・・・」

翠「やっやめるですぅ！水銀燈！」

水「・・・ふふふ！それはぁ・・・この私が！この私が貴方のローザミスティカを奪ったからよぉ！！」

その罪の告白は、なんとも悲しげな叫びに聞こえた

また、殺した相手に自分が殺しましたと告白するようなこのシチュエーションは・・・とてつもなく皮肉な出来事だった

翠（水銀燈は・・・言いたくなかった　思い出したくなかった　深く、反省していた　ただ、水銀燈の性格から素直になれなかっただけ　それなのに、私は・・・）

翠星石、水銀燈に言い放った「お前が蒼星石にやった仕打ち、許したわけではないですよ！」という台詞を回想する

水銀燈の叫びから、長い沈黙が訪れた

第八回　　返してよ・・・！！の巻

この重い沈黙を破ったのは、やはり蒼星石の答えだった

蒼「・・・そうだったね。君が・・・僕のローザミスティカを奪ったんだったよね」

水「そうよぉ・・・だったら何かしら？」

蒼「？」

水「貴方は、奪われたローザミスティカを取り戻すため、この戦いに参加した！自分を動かぬ人形にした私に復讐するため！！」

水銀燈、蒼星石の口から言われて欲しくないのか、自分から蒼星石の目的を語る

しかし、意外にも蒼星石の言葉は違っていた

蒼「違うよ・・・水銀燈」

そうったときには。すでに蒼星石の顔はいつもの優しそうな顔に戻っていた

水「え？」

蒼「僕も一度は考えたよ・・・・”復讐”を。だけど、翠星石が教えてくれたんだ復讐なんて嫌なことだって・・・ね？翠星石」

翠「そ・・・蒼星石ぃ！」

翠星石は、あまりの喜びで涙声になっていた

蒼「クスクス、だから復讐なんてする気・・・起こらないよ」

蒼星石の言葉に、一同は心を強く打たれた

ジ「なんて寛大な・・・」

金「蒼星石らしいのかしら～」

真「すばらしい心の持ち主だわ・・・」

次第に自然と拍手が蒼星石におくられた

水「蒼星石、貴方・・・」

水（・・・謝るなら今ね）

水「そ・・・そのぅ」

蒼「ん？ああ、忘れてた」

てへっと舌を出すと、なんと右手を水銀燈の前に差し出した

一同「！？」

蒼星石、にこりとした表情を崩さず、右手を前に差し出している

翠「まさか、握手までしてあげるとは・・・なんて・・・なんていいやつですかぁー！」

金「うう、カナ感動かしら～」

ジ「蒼星石のやつ、全てを許すつもりなんだな」

真「ええ・・・そう願いたいわ」

水（ここまで先を越されてしまうとはね・・・我ながら情けないわ）

水銀燈、その手に答えるため手を前に差しだそうとする

誰もが握手するのだと予想していたその瞬間・・・

蒼星石、にこりとした顔で水銀燈に言う

蒼「さあ、僕のローザミスティカ・・・返してよ」

第九回　当然の答え！の巻

誰もが耳を疑った　蒼星石は握手を求めていると

誰もがそう思っていたからだ・・・

だが結果は違っていた

只、自分のローザミスティカを返してもらうため

手を差し出しただけだったのだ

よく考えれば分かることだったかもしれない

蒼「僕から奪ったローザミスティカ・・・返してくれないかな？」

なおも、蒼星石の顔はにこりと微笑んでいるように見えた

水「・・・無いわ」

蒼「無い？」

水「・・・」

蒼「どういうことかな？」

蒼星石の表情がいつの間にか無表情へと変わっていた

真「・・・その質問には、私が答えさせてもらうわ」

見ていられないのか、真紅が口をはさむ

真「あのアリスゲームの後、勝者は誰も出なかった。そして、薔薇水晶にやられた子達は、またローザミスティカを一人一つずつ与えられて復活したの・・・。」

あのアリスゲームを思い出しながら、真紅は語る

真「でも、貴方と雛苺のローザミスティカだけは何処かに行ってしまった・・・。分からないのよ・・・本当に。」

蒼「そう・・・やっぱり、そうなんだ」

真「え？」

まるで、分かってましたかのような言い方に真紅は戸惑う

蒼「そういえば、僕が何故動けるのか・・・話してなかったね」

一同「！？」

その質問は、みんなが一番聞きたい謎だった

水銀燈にローザミスティカを奪われた蒼星石

昨日まで、たしかに鞄の中で眠っていたのだ

蒼「その理由は簡単・・・僕は今、ローザミスティカをある子から借りているのさ」

真「ローザミスティカを・・・」

水「借りている？」

金「い・・・いったい誰から？」

蒼「その子の名前は・・・」

？「はぁ～い！ちょっと待ったぁー！」

突然響き渡る高い声

一同「！？」

？「だめだめ、自己紹介は自分でやるものでしてよ？蒼星石お姉様」

蒼「・・・そう？じゃあ、後は任すよ」

雪「ばごあ、ばごあ・・・初めまして私はローゼンメイデン第七ドール・・・雪華綺晶です♪」

第六回～第九回（後書き）

雪華綺晶の性格は、実際とは異なりかなりオリジナルな部分が含まれているかも知れません。ご了承下さい。

第十回～第十二回

第十回　突然の来訪者！その名は雪華綺晶！？の巻

服装は白薔薇の髪飾りに白いミニスカートと白い編み上げのロングブーツ　さらに右目からは白い薔薇の花がアイホールから突きだしている　それ以外は薔薇水晶と姿が似ている

真「だ・・・第七のドール」

水「本当かしら？また前みたいに偽物じゃあなくて？」

翠「薔薇水晶と容姿が似ているですぅ・・・」

金「て・・・敵なのかしら！？」

雪華綺晶、ため息混じりに

雪「信じるも信じないのも貴方たちの勝手ですわ。ちなみに、私は敵でも味方でもありません。」

雪華綺晶、続けて答える

雪「確かに、怪しく見えるかも知れませんわ。でも、私は蒼星石のお姉様に貸して差し上げるほど親切でしてよ。ねぇー？」

そういって、蒼星石の肩に腕をのせる？

真「そんな！？ローザミスティカが無ければ動くことができないはず・・・それなのにどうして？」

雪華綺晶、腕を組み考えるポーズをとる

雪「うーん、私にも詳しいことは分からないなぁー。でも、ローザミスティカがなければ動かないっていうのは違うと思いますわ、紅のお姉様。」

真「！？」

雪「例えば・・・お父様の弟子のドール達。彼女達はローザミスティカなんか無いのに動くことが出来るでしょ？つまり、時代が新しくなるにつれ技術は進化していったというわけ。」

雪「まぁ、こんなこと言うのもなんだけどぉー・・・ローゼンメイデンの中で一番若い私はローザミスティカがなくても自由に行動できるのよ♪」

水「・・・なんか生意気ねぇ」

翠「しゃくに障るですぅ」

雪「ばごあばごあ・・・でも、お父様の弟子はローザミスティカ無しで動けるドールを作ることが出来たにもかかわらず、ローザミスティカを欲した。」

真「・・・たしかに」

雪「さて・・・それは何故でしょう？」

水「つべこべ言わず、さっさと答えを出しなさい！」

シャッ

水銀燈、黒い羽を雪華綺晶にむけて飛ばす

・・・が、しかし

スッ

水「なっ！すり抜けた」

雪「ふふふ、今の私には当たらないの。ごめんなさい♪　これも、ローザミスティカが無いせいなのよぉ＞＜」

雪「だから、蒼星石お姉様の肩に手をのせたのも演技♪」

そういって、蒼星石の体に腕をとおして遊んでいる

蒼「・・・止めてくれない？」

蒼星石の素っ気ない答えにつまらなそうな雪華綺晶

真「・・・で、答えは何なの？雪華綺晶」

雪華綺晶、ちょっぴり舌を出し

雪「ごめんなさぁい・・・さっきの問題だけど、実は私も答えが分からないのよぉ」

一同、ガクリ

雪「ローザミスティカが無くても動ける私には、それほど必要なものじゃないの。だから・・・私は違う方法でアリスを目指すことにした」

水「あ・・・アリスですって!?」

真「いったいどうやって!?」

雪（ばごあばごあ・・・やっぱりこの二人のドールは食いつきがいいわね）

雪「私は今までその方法を調べてきました。だから、全てをお教えすることは出来ませんわ＞＜」

水「生意気な!」

キッ!と睨む水銀燈に微笑み

雪「でも、ヒントだけなら教えて差し上げます。そのためには・・・今開催されている、このアリスレスリングの舞台が必要なのです!」

真「私が偶然アリスレスリングの舞台ですって!?」

雪「そう・・・貴方が用意してくれたアリスレスリングの頂点、そこにアリスへの道が隠されているのですわ」

真「・・・その頂点に、アリスへの・・・道」

翠「ちょっと・・・ちょっと真紅、都合がよすぎじゃないですか?絶対罠ですよ」

真「そうね・・・たしかにあやしいわ」

雪（ふん、用心深い翠星石お姉様・・・あの作戦を決行させるべきね）

ズシャズシャズシャ

突然リングの中央から巨大な水晶が！

そして、その天辺には薔薇水晶が！？

真「あれは・・・まさか、薔薇水晶」

水「次から次へと・・・まるでドールのバーゲンセールだわ」

金「あれ？何かを持っているのかしら？」

翠「よく見えないですぅ」

巴「あーーとっ！突如あらわれた薔薇水晶！水晶の天辺に堂々と立っているぅーー！」

巴「おや？薔薇水晶、何かをお姫様だっこしているようだがあれは・・・」

ジ「ほんとだ・・・あれはいったい」

巴「キャアアアアアアアアアアアアアアアア！雛苺ぉ！」

一同「！？」

突然叫び声をあげる巴

それもそのはず　昨日から預かっていた雛苺が誘拐されたと分かったからだ！

薔「・・・将軍、命令通り・・・雛苺を連れてきた・・・」

雪（ばごあばごあ、よくやったわ。薔薇水晶）

第十一回　薔薇の四天王！の巻

巴「そんな・・・そんな、雛苺が・・・あぁぁ」

ドスンッ

巴、ショックに気絶する

真「しっかり、巴！ジュン、後は頼んだわ！」

ジ「ああ。でも真紅？お前はどうするんだ！？」

真「もちろん、今すぐ雛苺を奪い返すのだわ！」

翠「あ、翠星石も行くですぅ！」

金「か、カナもー！」

雪（ばごあ、ばごあ・・・いいわぁ・・・その調子ですわ）

蒼「・・・」

三体のドールが、水晶の天辺にいる薔薇水晶に向かっていく

真「さあ、おとなしく雛苺を返してもらうわ！」

しかし・・・

A「邪魔はさせませんわ！」

真「くっ！」

B「どきな」

翠「きゃあ！」

C「お姉様の邪魔は・・・許さない！」

金「何かしら～！？」

突然、水晶の中から三つの影が出てきて真紅達の行く手を阻む

その三つの影は、ローゼンメイデンのドールズ達に勝るとも劣らない容姿を持つドール達だった

真「何をするの！貴方たち」

A「貴方の邪魔をしているのよ、ローゼンメイデンの第五ドール、真紅さん」

翠「邪魔をするなですぅ！さっさとどきやがれぇーですぅ！」

B「嫌なこった、第三ドール、翠星石」

金「このままでは、雛苺を助けられないのかしら～」

C「・・・」

水「また新しいドール！？シンジラレナーイ・・・」

ジ「しかも、明らかに真紅達と敵対している」

真「くっ・・・どうすれば！？」

雪「私に任せて、紅のお姉様♪」

真「雪華綺晶！？」

雪「蒼星石のお姉様・・・少しの間ローザミスティカを返して下さらない？」

了承したのか、蒼星石はローザミスティカを雪華綺晶に差し出し自分は抜け殻のように倒れた

雪「ごめんなさいね、すぐ返しますから♪」

雪華綺晶、薔薇水晶の方向へ飛んでいく

雪「こらー！私のお姉様の敵は、私の敵よぉー！」

薔「・・・」

ガシッ

雪「私と似て可愛いからって、容赦しないんだからぁー」

雪華綺晶、薔薇水晶の頭をヘッドロックする

そして、耳元でこっそりと

雪（いいわよぉ、その調子！上手いわぁ・・・貴方天才かも！）

薔：

雪（そうね・・・次はこういいなさい　・・・）

薔（・・・了解）

雪「きゃあ！」

雪華綺晶、薔薇水晶に吹っ飛ばされる

真「雪華綺晶！くっ、邪魔さえなければ・・・」

薔「・・・聞きなさい。ローゼンメイデンのドール達」

薔「雛苺は、我らが首領・・・薔薇将軍とその四天王が預かった・・・」

雪「ば・・・薔薇将軍ですって！」

雪華綺晶、大げさに驚く

真「知っているの？雪華綺晶？」

雪「そ・・・それじゃあ、彼女らはもしかして・・・」

A「（まったく臭い演技ですこと）・・・そう、私たちは！」

B「（命令やから仕方ない・・・）・・・薔薇将軍サマに仕える！」

C「・・・四人の戦士」

薔「薔薇のちっ・・・四天王」

雪「うわぁぁぁ、や・・・やっぱり！！」

ジ（どうでもいいけど、大事なところで噛みやがった・・・）

第十二回　薔薇将軍の挑戦状！の巻

真「雪華綺晶、薔薇将軍について話してくれる？」

雪華綺晶、こくりとうなずき

雪「ドールの中でも最も美しく、強いと言われているドールです。
そして、彼女もまた・・・究極の少女、アリスを目指しているのだとか」

真「・・・そんなドールが存在するなんて」

水「ふん、気に入らないわね。・・・特に最も美しくってところ」

四天王のうち真紅達の邪魔をしていたドール達は、いつの間にか薔薇水晶の元へ集まっていた

A「やはり、全然たいしたことありませんわね。姉上様を苦しめたとは思えませんわぁ」

B「まったくやわ」

C「・・・雑魚」

ジ「さっきから気になっていたけど、あのドール何処かで見たことがある。」

真「ジュン？本当？

ジ「あれは・・・確かあの店。もしかして、お前達・・・エンジュのドール達なのか？」

A「・・・まあ別に隠す必要は無いですわね。」

B「うちもあんたの顔・・・見覚えがある。お父様の店によく出入りしとったでしょ」

C「・・・」

なんと、突如現れたドールの正体は、薔薇水晶と同じくエンジュ作

のドール達であった！！

ジ「やっぱり・・・」

真「薔薇水晶をはじめとした貴方たちが、何故また私たちの邪魔を！？」

薔「・・・答える必要は無い」

薔薇水晶、違うエリアへの扉を開く

薔「雛苺を返して欲しければ、三日後・・・またここに来なさい

薔薇将軍サマのフィールドへ連れて行ってあげる・・・」

真「待ちなさい、薔薇水晶！私はまだ聞きたいことがッ！」

真紅の叫びもむなしく、薔薇の四天王、雛苺を連れたまま何処かへ消える

真「くっ・・・逃がしてしまったのだわ」

翠「そんな・・・チビ苺が」

金「ううっ・・・」

そんな真紅達に同情するように・・・

雪「・・・薔薇将軍は既に知っているのかも知れません。アリスレスリングを通してアリスになる方法を」

真「・・・そういえば、貴方もそのようなことを言っていたわね」

雪「薔薇将軍は、アリスレスリングに私たちを巻き込むため雛苺お姉様を誘拐した・・・そう考えられます」

真「アリスになるため・・・か（アリスになるためには、やはり犠牲が必要・・・）」

翠「チビ苺を取り戻すには、あえて敵の罠に踏み込まなくてはならないということですか？」

雪「はい・・・そうなってしまいますね」

真「・・・いろいろとありがとう、雪華綺晶」

雪「いえ、お役に立てて良かったです♪それでは、私も薔薇将軍について調べてみます」

真「待って！」

すうっ

真紅、右手を前に差し出す

雪「？なんですか・・・この手は？」

真「知らないの？握手よ。貴方とは、仲良くなれそうだから・・・」

雪「アクシュ？・・・いいんですか？私もアリスを目指す身、いずれはお姉様達と敵対する関係ですのに」

真「そんなのは関係ないわ・・・そのときになったら、正々堂々戦いましょう！そのための握手でもあるのよ」

雪「・・・分かりました」

がしっ

雪華綺晶、にこりと笑って真紅と握手する

真「貴方のような姉妹を持って嬉しいわ、雪華綺晶」

真紅も微笑み返す

その微笑みに雪華綺晶、何故か戸惑い

雪「ええと・・・あっ、ローザミスティカを蒼星石のお姉様に戻さないと！」

雪華綺晶、蒼星石の方に行きローザミスティカを戻しにその場を離れる

翠「・・・これからどうするですか？翠星石は、いろんなことが起こりすぎて頭がパンクしそうですぅ」

真「そうね・・・三日後、お遊びじゃない本格的なアリスレスリングに私たちは巻き込まれるわ」

金「・・・あ、そういえば、水銀燈は何処に行ったのかしら？」

さっきまで水銀燈のいた場所には、彼女から抜け落ちた黒い羽しか残っていなかった

雪「きゃあ！」

蒼星石、ものすごい勢いでｎのフィールドから出て行く

翠「ま・・・待つです！蒼星石！」

翠星石の叫びもむなしく、蒼星石はすぐに見えなくなった

雪「水銀燈のお姉様がいなくなったと言ったらものすごい勢いで・・・」

翠「そ・・・そんなぁ」

翠（蒼星石はいったい何を考えているですか？）

真「・・・これからのあの二人の関係もややこしくなりそうね」

雪「それでは、お姉様方とそのマスター・・・お別れです」

翠「・・・怖い奴だったらどうしようと思ったですけど、一安心です。・・・蒼星石のことよろしく頼むです」

金「元気でかしら～」

真「さようなら、また会いましょう」

雪華綺晶、みんなに手を振りながらその場から消える

真「さて、私たちに残された課題は大きいわ」

翠「・・・やっぱり、また戦うですね・・・」

金「で・・・でもでも、今回はローゼンメイデンのドール同士は争わなくてすみそうなの」

真「ええ、そう思うわ金糸雀」

翠「たしかに・・・もう姉妹同士で争うことは嫌ですぅ」

真「残された三日間で、もっと強くなるのだわ！待ってなさい・・・薔薇将軍！」

第十回～第十二回（後書き）

水銀燈　ＶＳ　翠星石編　完

第十三回～第十五回（前書き）

与えられた三日間編

第十三回～第十五回

第十三回　蒼星石の忠告！の巻

薔「雛苺を返して欲しければ、三日後・・・またここに来なさい
薔薇将軍サマのフィールドへ連れて行ってあげる・・・」

本当のアリスレスリングが始まるまで残された時間は後3日・・・

その3日間の間、それぞれの乙女達は何を思うのか・・・

アリスレスリングがあった日、ドール達は皆疲れていた

その日は夕食を軽くとり、8時頃には皆床についた

そして翌日

目が覚めたのは翠星石が最初だった

翠「ふあ・・・あ・・・あれ？翠星石が一番早起きですぅ？」

正面にはまだジュンが寝ており、右隣には真紅の鞄がある

そして、左隣には蒼星石の鞄が・・・

翠「・・・」

翠星石は昨日のことがただの夢だったのではないかと思い、蒼星石の鞄を開けた

しかし、蒼星石はそこにはいなかった

いつも眠っているように横たわっていた蒼星石は、やはりいなかったのだ

そう、昨日の出来事は真実だった

翠「蒼星石、おまえはいったい何を考えているのですか？」

キラキラ

翠「あれ？これは、蒼星石の人工精霊、レンピカじゃないですか。なんで蒼星石と一緒にいないんですか？」

翠星石がそう訪ねると、レンピカが何かを訴える

翠「え？一人だけでついてきて欲しい？あ！待つですぅ！」

レンピカは、窓の隙間から外に出て行ってしまった

翠星石、レンピカを鞄に乗って必死に追いかける

レンピカを追ってついた場所は、近くにある山の中だった

翠「いったい何処にいるですか、蒼星石ぃ～！」

蒼「ここだよ」

木の幹に腰掛けている蒼星石が翠星石を呼んだ

蒼「悪かったね翠星石、こんなところまで呼んじゃって」

翠「蒼星石！まったくびっくりさせやがるですぅ」

また蒼星石に会えて喜ぶ翠星石

蒼星石も同じく翠星石と話ができて嬉しいのか、微笑んでいる

・・・が、急に真面目な顔になり

蒼「翠星石、君をここに呼んだのは、忠告しておくことがあるからなんだ」

翠「・・・忠告？」

翠星石、少々驚き蒼星石に聞き返す

翠「それは、何ですか？」

蒼「単刀直入に言おう・・・真紅には気をつけた方が良い」

蒼星石の意外な告白に驚きを隠せない翠星石

翠「な・・・どういう意味ですか！？蒼星石」

蒼「・・・まず、真紅の話の前にＮＩＫＵグッズのことを話しておかないといけないね」

翠「にく？グッズ？」

蒼「正式な名称は分からない・・・。ＮＩＫＵグッズとは、ある漫画に登場するキャラクターの持っている道具、装備などのことなんだ。」

翠「・・・その漫画とは何です？」

蒼「君もよく知っているはずだよ・・・。真紅がアリレスを始めようとしたきっかけにもなっている」

翠「そりゃあ、中には漫画の登場人物と同じ格好をすることで自己満足する人間もいるらしいですから、グッズなんてあっても不思議じゃないですけど」

蒼「不思議なのはここからさ。世の中には、たしかに翠星石の言うようにそういった物であふれかえっている。でも、ＮＩＫＵグッズだけは違うんだ・・・。」

蒼「そのグッズを身につけた者には・・・その人物の思考が乗り移るという。そして、その者の能力を一部使うことができるそうだ」

翠「なっ・・・ありえんですぅ！ばかばかしいですぅ！真紅のことといいそのグッズのことといい、冗談が過ぎるですよ！蒼星石！」

蒼「・・・まあ、見てもらわないことには信じてもらえないだろうね」

そういうと、蒼星石は木からおりた

蒼「・・・見ててよ」

このために用意したらしいコンクリートの電柱に向かい合い何かぶつぶつとつぶやく

翠「いったい何をやってるですか？」

翠星石の声が聞こえないのか、集中している

そして・・・！

蒼「これがっ・・・ＮＩＫＵグッズの力だっ！」

ボアッ

翠「あ、蒼星石の右手に炎が！」

蒼「ベルリンの赤い雨ぇ！」

蒼星石が叫び声とともに右手を振り下ろすと、さっきまであった電柱は真っ二つになっていた

翠「そんなっ・・・庭師の鋏を使わずこんなことって・・・」

蒼「ふぅ・・・これが、僕の持っているＮＩＫＵグッズ、髑髏（どくろ）の徽（きし）章（よう）の力さ」

蒼星石は、自分の胸につけていたバッジらしきものを翠星石に見せる

翠「これが・・・蒼星石の言うＮＩＫＵグッズのうちの一つ」

蒼「そう・・・これはあのドイツ出身の超人の持つ髑髏の徽章をモデルに作成されたものだ」

蒼星石は続けて話し

蒼「個人差はあるかも知れないけど、これを持ちながら練習をすれば、あらゆる技が頭の中をよぎっていく」

翠「この目で見ちまったからには、その存在を信じるですけど・・・これと真紅とどんな関係があるっていうですか？」

蒼「実は・・・真紅もＮＩＫＵグッズのうちの一つを持っているんだ！」

翠「なっなんですってぇー！？で・・・でも、たとえ真紅が持っていたとしても関係は・・・」

蒼「大ありなんだよ翠星石！」

蒼星石、力を込めて言う

蒼「このＮＩＫＵグッズはさっき見てもらって分かったように、使用者に非常に大きな力を与えてくれる。でも、急な力は使用者を狂わせてしまう。その力の魅力のとりこになってしまうんだ！！」

翠「そっそんなっ！」

さらに説明を続け

蒼「この髑髏の徽章だって僕にとって魅力だった！倒したい奴を倒

すためには必要な物だと・・・そう考えていた時期もあった！」

翠「蒼星石・・・」（水銀燈のこと？）

蒼「でも、僕が何とか正気を維持できた！何故なら、元々このＮＩＫＵグッズをモデルにした対象が、新世代超人の中でも正義を愛する超人だったからなんだ」

翠「そうですね、アイツは馬鹿がつくほど真面目なキャラです」

蒼「くすっ、そうだね。・・・でも、逆に考えることも出来るんだよ」

翠「逆にですか？つまり・・・もし、ＮＩＫＵグッズのモデルが悪者だったら・・・ああ！！」

蒼「そう、考えるだけでも恐ろしいよね？」

翠「も・・・もしかして！」

蒼星石はコクリとうなずいて

蒼「真紅は・・・悪の中でも悪な超人のＮＩＫＵグッズを持っているのさっ！」

翠「たったしかに、ＮＩＫＵグッズの存在は信じるです！でも・・・でも、その話だけは信じられないですぅ！真紅はいつも通りの真紅だったですぅ！」

蒼「・・・これは、ただの忠告。だから、信じる必要はないよ・・・

。でも、君にだけは真実を言っておきたかったんだ、翠星石。」

くるりと後ろを向く

翠「まっ待つですぅ、蒼星石！」

蒼「・・・これを渡しておくよ、蒼星石」

さっ

翠「・・・こっこれは！髑髏の徽章じゃねぇですか！？こんな大切なものを・・・」

蒼「僕も2日後のアリスレスリングにまた出場すると思う。でも、今度はそれはいらない・・・もうほとんど覚えちゃったしね。」

翠「でもっ」

蒼「今は君に持っていて欲しいんだ・・・薔薇将軍達・・・そして、味方からの裏切りから身を守るためにね」

翠「まだ言いやがるですか！」

蒼「だから、その髑髏の徽章のことは真紅には黙っていた方がいいよ・・・じゃあね、翠星石。」

そう言い残すとともに、蒼星石は消えた

翠「そんなっ・・・そんなっ・・・」

次第に、翠星石の眼から涙があふれてくる

翠「蒼星石は、今まで冗談以外嘘をついたことがないですぅ・・・」

ポタッ　ポタッと涙が膝にこぼれる

翠「もう分からない・・・いったい、どっちを信じればいいんですかぁ・・・うううっ・・・」

翠星石の涙はしばらく止まらなかった

翠星石の嗚咽を聞き、森の動物たちが遠くから翠星石を見守る

まるで、彼女を心配するかのように・・・

第十四回　水銀燈の個人レッスン編！の巻

時は少しさかのぼり、水銀燈ＶＳ蒼星石があったアリスレスリングの日

水銀燈、蒼星石との戦いでの失態とプロレスのルールをよく知らなかった恥ずかしさから病院に逃げ帰ってきた

め「あら、お帰りなさい水銀燈。結果はどうだった？」

水「・・・うるさい」

そういうと、すぐに鞄の中に入ってしまった

め「・・・あまり良くなかったみたいね。・・・大丈夫！そんな水

銀燈のために必勝のための本を用意しておいたから。この机の上に置いておくから、気が向いたら読んでね？」

窓の外

蒼「まさか、あの水銀燈にマスターがいたなんて・・・。仕方ない、今日は出直すか」

さっ

同日午後１０時

がちゃ

水「・・・よし、どうやらめぐは寝てるようね」

水銀燈、静かに鞄の中から出てくる

水「たしか、この机の上って言ってたわね・・・ルールブックかしら？それともハウトゥー本かしら？」

水銀燈、重なっている本の一番上にある本をとって見てみる

水「え～なになに？きん・・にく・・・ってこれ漫画じゃないのよ！」

水「それになんでこんな豚面の男が主人公なの？こんなんでファンがつくとでも思っているのかしら？」

試しに、１P読み・・・その内に読みふける

水「じー・・・なかなか、面白いわね・・・・特に、脇役のキャラが個性的だわ」

ぺら

水「やっぱり人気投票はこうなるわけねぇ」

ぺら

水「めぐは、私にこの漫画の技を参考にしろと言いたいのかしら？・・・まあ、確かに派手でかっこいいわね」

それから一時間後

水「あら、このオリンピック編の結末は意外だわ・・・。人気があるからかしらねぇ・・・」

水銀燈、オリンピック編を読み終わり次の本に手を伸ばす

水「あれ？この本、厚さも違うし大きさも違う・・・え？絵柄もも違うわ・・・何なのコレ？」

ぺらっとページをめくり、作者コメントを見る

水「作者の名前も違うじゃない・・・ケビン○スク×クロ○？どういう意味かしら・・・」

そして、次のページを見た瞬間　水銀燈は見てしまった

水「・・・げ、きゃあああああああハグムゥ！」

突然後ろから何者かに口を押さえられる水銀燈

め「ふふふっ・・・病院で大きな声を出しちゃだめでしょ？水銀燈・・」

水「ふが・・・ふが・・・（お・・・起きてたの？めぐ）」

め「ふふふ・・・流石水銀燈、目の付け所が違うわねぇ」

水「もが・・・もが・・・（いったい、どういう意味で）」

め「レスリング、私が教えてあげるわね、水銀燈。私がクロ◯・・・貴方がケビ◯の役ね」

水「ふが・・・（やめっ）」

ンッーーー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！

水「はあっ・・・はあっ・・・も・・・もうだめっ・・・めぐぅ」

め「ふふふ、何言ってるのよ・・・まだ・・・始めたばかりでしょ？」

水「そっそんなこと言っても・・・この体勢はきつい・・・はあっ・・・はあっ」

め「そう？なら、もっと体を反らせてあげる♪」

水「あっ！だめ！アッー・・・」

水銀燈、力尽き技をかけていた練習用人形から崩れ落ちる

め「もう～、水銀燈ったら、体が硬すぎるわ。これじゃあこの技をマスター出来ないじゃない」

水「無理よ・・・バランスをとるのがやっとで・・・どんなに優れた能力を持つドールでも　この技を極めるのは・・・」

め「・・・あ～あ～あ、今頃真紅や蒼星石達は水銀燈のことをなんて言ってるだろうなぁ～」

水「！？」

め「（裏声で）あの臆病ドールったら、我先に逃げ出しちゃったのだわ（笑）」

水「くっ！」

め「（裏声２）ちょっと本気でやりすぎちゃったかな？我ながら大人げなかったなぁ～（笑）」

水「止めなさいっ！」

め「（裏声３）まったく～しゃーねーチキン女ですぅ～（笑）」

水「やるわよっ！やればいいんでしょ！？」

水「見てなさい！そこに書かれている技、全てマスターしてやるわぁ」

め「その調子その調子♪せっかく、貴重なこの本「私はこうやってオリンピック優勝させた！」を手に入れたんだから、ちゃんと技をマスターしてもらうわよ♪」

水「このぉ！このぉ！」

め「天使のように細心に・・・悪魔のように大胆に・・・ね」

第十五回　必殺技真紅バスターッ（フェイバリットホールド）！！の巻

真紅、いつもの時間通りに起きる

真「ふあっ～・・・。あれ？翠星石の鞄が無い・・・いったい何処へいったのかしら」

ガチャ

ちょうどそのとき、翠星石が帰ってくる

翠「・・・あ、し・・・真紅！？もう起きてたですか？」

真「あら？貴女にしては珍しく早起きね」

翠「そっそうですか？翠星石はいつも早寝早起き健康ドールですよ」

真「・・・そうだったかしら？」

翠「・・・正直、昨日のことが記憶に残っててよく眠れなかったですぅ」

真「ふふっ、貴女らしいわね翠星石。でも、そこが貴女の良いところなんだけど」

下からのりの声がする

の「真紅ちゃん、翠星石ちゃん！朝ご飯よぉ～」

真「大丈夫、ご飯を食べれば元気が出るわ。さあ、行きましょう」

翠「・・・ですぅ」

真（・・・あえて聞かなかったけど、翠星石はいったい何処へ行っていたのかしら？）

翠（・・・やっぱり普段と変わらない真紅ですぅ。翠星石にはいつも通りに見えるですぅ）

ピンポーン

の「はーい？あら、カナちゃん」

金「おはよう、修行しに来たのかしら」

の「へ？修行？」

真&翠（キッ）

真紅と翠星石のWにらみ

金「ひっ！」

真「そうよ、今金糸雀に名探偵になるにはどうするかを教えているのだわ」

翠「さあ、朝ご飯を食べたら修行開始ですぅ」

の「あら、楽しそうでいいわねぇ♪」

のりが、台所に戻ると

真「・・・今回のことはのりには内緒よ」

翠「もうこれ以上心配かけたくないですぅ」

金「そっそうね、正論なのかしら・・・」

3人のドール達、軽い朝食をとる

真「それでは、早速nのフィールドにある練習用リングに行くわよ」

翠「はいですぅ」

金「了解なのかしら」

3人のドール達、nのフィールドにある練習用リングの前に来る

翠「着いたです。・・・で、何をするですか？」

金「やっぱり基礎練習？」

真「せっかく3人揃ったのだから、もっと派手な練習をしましょう」

翠「・・・というと？」

真「・・・ズバリ、必殺技の練習（フェイバリットホールド）よ！」

真紅、少し楽しそうに言う

翠「・・・まあ、一理あるですね」

金「でも、そんなの考えたこともないし、持ってもないわ」

真紅、あきれた声で

真「まったく、そんなんじゃあ薔薇将軍達に勝てないわよ」

翠「そういう真紅は何かあるですか？」

真紅、待ってましたかのように

真「フフーン、もちろんなのだわ。ちゃあんと私専用の必殺技を用意しているわ」

翠「（ちぇ、地雷でしたか・・・）」

真「・・・みたい？」

翠「いや、別にいいですぅ」

真「・・・金糸雀はみたいわよね？」

金「え？」

真紅、金糸雀に顔を近づけ

真「みたいのよね？」

金「ひぇ・・・えーと・・・その、興味はあるかも・・・」

真紅、満足そうに

真「なら仕方ないわね。特別に見せてあげるわ♪」

金「お願いするのかしら」

真「何言ってるの、貴女が私のスパーリング相手となるのよ」

金「えぇ！？」

翠（まっ、こんなことになると思ってたですけど）

真「では今から、練習試合　真紅　ＶＳ　金糸雀　を開始するのだわ！」

金「ちょ・・・ちょっと待って真紅」

翠「ちょうどよかったじゃないですかぁ、あのときのトーナメント

戦の再会ができて♪」

金「そっそんなぁ・・・」

翠「それじゃあ、ここにいると邪魔になるので、翠星石は外でリングを鳴らすですぅ」

真「お願いするわ、翠星石」

翠「それじゃあ、いくですよぉ！それっ！」

カーーーーーンッ！

練習試合

１０時　真紅　ＶＳ　金糸雀　開始

真「どこからでもかかってきなさい、金糸雀」

真紅、手でかかってこいと挑発する

金「も・・・・もうどうにでもなれーっ！なのかしらー！」

金糸雀、真紅に向かって猛然と突っ込む

翠「ありゃ・・・何の芸もないただの体当たりですか。しかも眼をつぶってやがるです（汗）」

翠星石、あきれている

真「あら・・・まるで私に今すぐ必殺技をかけて欲しいといわんばかりね」

真紅、ニヤリと笑い

真「見せてあげるのだわッ！」

ガシッ

金「ひっ、何をする気かしらぁ～っ？」

真「猛進力に逆らうことなく相手の頭を左腕で捕獲　同時に頭を相手の左肩下にもぐり込ませる」

金「ひぃ！」

真「両腕の絡みを強固にして大地の巨木を引き抜く心構えで相手の体を高くさしあげる」

翠「まっまさか・・・あの技は・・・」

真「そして両内腿もおさえ体の自由を奪ってしまう！」

金「ああっ・・・動けない！」

翠「やはり、あれは首、背骨、腰骨、左右の大腿骨の五カ所を一度に粉砕する技・・・キン肉バスターですぅ！」

金「な・・・なにかと思えばキン肉バスター、全然真紅オリジナルの技じゃないのかしらぁ～」

真「・・・」

金「そっそれに、この一見脱出不可能に見えるこの技に弱点があることぐらいお見通しなのかしら！」

翠「そう、一見脱出不可能の完璧な技に見えるキン肉バスター・・・しかし、唯一の弱点がある！それは・・・」

金&翠「首のフックが甘いこと！（かしら！）（ですぅ！）」

真「ふっふっふ・・・甘いわ金糸雀・・・この真紅、既存の技をそのまま何の改良も無しに真似するとでも？」

金「ふん、強がりはよすのかしら真紅。悪いけど、早速脱出させてもらうのかしら！ネックエスケープキン肉バス・・・あれ？」

ぐいぐいっと何度金糸雀が首を抜こうとしても、まったく動かない

金「そっそんな・・・」

混乱している金糸雀に、真紅が教える

真「技をかけられている貴女には、この仕掛けを見ることは難しいかもね。ほら、翠星石にでも教えてもらいなさい」

金「翠星石に？」

そういって、翠星石の方を見る金糸雀

一方、翠星石は驚いた表情で真紅の技を眺めていた

翠「真紅、恐ろしい奴です・・・まさか、キン肉バスターの弱点をあんな風に克服するなんて・・・」

金「すっ翠星石、いったい何故首を抜くことが出来ないのか教えて欲しいのかしらぁ！？」

翠「・・・自分の首を見てみるですぅ」

金「首？・・・あ・・・あ～～～～～～っ！」

真「ようやくおわかり？」

なんと、金糸雀の首には金色の毛が巻き付いていた

その毛は勿論・・・

真「どう？私の自慢の金髪ツインテールは？こういう使い方も出来るのよ」

翠「まさか、自分の毛で相手の首をフックするなんて・・・真紅にしかできない芸当です！」

真「私が他人の技をコピーしたと思った罰よっ！くらいなさいっ・・・」

真紅、金糸雀を抱えたまま上空に飛び上がった

そして、リングめがけ落下していく――――！

真「真紅バスターッ！！」

第十六回～第一八回

第十六回　ライバルも負けじと技完成！の巻

金「く・・・動け・・・ない」

金糸雀、必死に技から逃れようとするがびくともしない

翠「そもそもキン肉バスターは、首、背骨、腰骨、左右の大腿骨の五カ所を一度に粉砕する必殺技・・・さらに真紅のツインテールでの首固定が加わっている・・・逃れられるわけがない！ですぅ」

翠「この真紅バスターという技・・・キン肉バスターの改良系なんかじゃない・・・これはれっきとした真紅のオリジナル必殺技だ――っ！ですぅ」

真「これでゲームオーバーよ！真紅バスターッ！」

ズド――――ン！

真紅の着地とともに、金糸雀の首、背骨、腰骨、左右の大腿骨の五カ所にダメージがいく

金「あ・・・・ああ・・・ぐはっ！」

金糸雀、がくっと失神する

真「・・・あら、気絶してしまったの金糸雀？ちゃんと着地の勢いを弱めておいたはずなのだけれど・・・」

そういって、金糸雀をリングの上にゆっくりとおろす

バタンッ

金「う～～～～」

金糸雀、目を回している

カンカンカーン

○　真紅　ＶＳ　●　金糸雀

１分１０秒　真紅バスター

翠「すごいですぅ・・・手加減してもこの威力ですか」

翠（蒼星石の言っていたＮＩＫＵグッズの力である可能性があるですね・・・ちょっと探りを入れてみるですぅ）

衣服の曲がりを直している最中の真紅に、翠星石が訪ねる

翠「真紅、まさかキン肉バスターを改良した新技を開発するとは思わなかったですよぉ！」

真紅、満足そうに

真「ふふふ、この真紅バスターさえあれば、薔薇の四天王や薔薇将軍なんて怖くないのだわ♪」

翠「まったくですぅ、いったいどうやって考えついたですか？」

真「え？・・・えっと、それは・・・ふとしたきっかけで・・・」

翠「翠星石も必殺技を考え出したいので、参考までに教えてもらってもいいですか？」

真「そっそれは・・・」

翠「それは？」

ガバッ

金「はれ～？・・・ここは何処かしら～？」

真「あら！金糸雀、やっと起きたのね」

翠（後もう少しだったのに・・・）

金「はっ！思い出したのかしらーっ！たしか真紅にぃ・・・」

真「わっわるかったわ金糸雀（汗）　お詫びに、貴方たちの必殺技を考え出す手伝いをしてあげるから」

なんとか許してもらった真紅

3人は、来る日のため修行に明け暮れるのであった

その一方・・・

水「うおりゃぁーーーー！」

ミシミシッ

水銀燈の複雑な関節技に、練習用人形の両腕関節をねじ上げる

ギシッギシッ

め「その調子よ、水銀燈！もっと体を後ろに倒しながら相手の両腕に負荷をかけるのよ！」

言われたとおり、人形の両腕に自分の体重をかける

水「そりゃぁあ！」

ブチッ

水「はあ・・・はあ・・・ついに、この技をマスターした・・・」

度重なる練習に疲労し、肩で息をする水銀燈

め「おめでとう、水銀燈。作戦・Ｔｈｅ　Ｅｎｄの技はほぼ完成ね。」

水「ふん、当然よ」

め「でも、安心してはだめよ。実際の相手は抵抗もするし、わずかな隙をついて反撃するかも知れないわ・・・。たとえ、両腕をもいだとしても安心できないわよ。」

水「・・・腕を、もいでも・・・。」

「腕をもぐ」という言葉に反応する水銀燈

水「・・・ふんっ」

水銀燈、冷たいまなざしで両腕をもがれた人形の頭部をつかむ

水「腕をもいでも安心できない・・・確かに貴女の言うとおりだわ！」

水銀燈、そう言って上空に人形を投げる

め「水銀燈？」

その人形の後を追うように、水銀燈も上空に舞い上がる

水「腕をもいでも私は負けた・・・負けてしまった」

水銀燈、逆さ状態で落ちてくる人形の頭を自分の両足はさみ、両腕で人形の両足をつかむ

水「もう二度と油断はしない！腕をもいだ後は・・・こうよッ！」

水「マーキュリー・エッジ！！」

ガシャーン！

人形の頭部は、無惨に粉々になった

め「相手の頭を地面に激突させる拷問技・・・ビッグベン・エッジという技があるけど・・・。」

めぐ、確信をこめて

め「この水銀燈の技は、ビッグベンよりも遙か上空・・・まるで水星ほどの高さから落下してくるような錯覚を見ている者に起こさせるわ！マーキュリー・エッジ・・・紛れもなく、水銀燈の新しい必殺技の一つだわ！」

水「待ってなさい、蒼星石、薔薇将軍！そして・・・真紅！私はもう二度と負けはしない！そして、お父様に認められる最強の少女・・・アリスへとなる！」

各ドール達は、全ての決着をつけるアリスレスリングの日まで猛烈な修行を重ねる

そして、ついにその日がやってきたのだった！

第十七回　約束、そして決戦の日！の巻

3日後、真紅、翠星石、金糸雀の3人のドールとジュン、巴の二人は薔薇水晶に言われた場所に来た

真「この日がついに来てしまったのね・・・謎のドール、薔薇将軍と、お父様の弟子が作ったドール、薔薇水晶との戦いが！」

翠「正直、薔薇将軍っていうけったいな名前を持つドールについて謎が多い上に・・・」

金「何故、薔薇水晶達がそのドールと組んでいるのか分からない・・・」

真「でも、私たちは勝たないといけないのだわ・・・雛苺を救うため、そして薔薇将軍の野望を打ち砕くために！」

この日が来るまで、それぞれのドールは時には個人で・・・時には一緒に修行を重ねていった

彼女らの目だけは、以前よりも力強い光を灯している

ジ「そうだよ、お前らが負けるわけないさ」

巴「がんばって・・・みんな」

真「大丈夫よ…巴、絶対に雛苺を助けだすと約束するわ！」

翠星石、真紅のそんな雛苺に対する思いやりを見て・・・

翠（・・・やっぱり真紅が変だなんて思えないですぅ）

真「どうしたの、翠星石？」

翠「へ？あ、いや、何でもないですぅ。えへへ…」

真「そう？ならいいわ」

シュルシュルシュルシュル！

突然、真紅達の近くから白い薔薇の茨が生えてきた

真「・・・ついに、登場ってわけね」

翠「薔薇将軍のフィールドですか」

金「どんどん茨が洞窟のような形になっていくのかしらー！？」

コツコツ

ハイヒールの音が、茨で出来た洞窟の穴から聞こえてくる

洞窟の穴から現れたのは、薔薇水晶だった

薔「・・・よくきました。さあ、この茨で出来た穴を通ることが出来る勇気があるのならば来なさい」

薔薇水晶、一呼吸おいて

薔「ただし、ローゼンメイデンのドール達だけ・・・人間が入ることは許されません」

ジ「そんな！？一緒について行くぐらい別にいいだろ！」

真「心配しないでジュン、私たちなら大丈夫」

ジ「でも・・・」

薔「・・・そのかわり」

薔薇水晶、一枚の紙切れをジュンに渡す

ジ「ん？なんだこれ・・・ｗｗｗ．・・・ってこれ何かのＵＲＬか？」

薔「私たちの偉大なる将軍は、そこから『ねっとはいしん』するとおっしゃっていました」

ジ「は・・・ネット配信だと！？」

あまりにも意外な答えに、ジュンは度肝を抜かれる

薔「さて・・・貴方たちの目の前には３つの洞窟があります」

真紅達の前には、確かに薔薇の茨で出来た洞窟が３つあった

薔「左から順番に、『投げ技の洞窟』、『打撃技の洞窟』、『関節技の洞窟』・・・それぞれの洞窟には、名前の技を得意としている私の姉妹が門番として待ちかまえています」

真「・・・前、私たちの邪魔をしたあの３体のドールズ達は貴女の姉妹だったのね？

薔「・・・」

薔薇水晶は、真紅の言葉を無視し話を続ける

薔「貴方たちには一人ひとつ洞窟を選んでもらいます」

翠「・・・別れて行動しなければいけないですね」

金「ちょ・・・ちょっと不安なのかしら」

金糸雀が不安そうな声で言う

真「大丈夫よ、今日までの間ずっと修行に明け暮れていたのよ。努力は嘘をつかないわ」真紅が金糸雀を勇気づける

薔「・・・それでは、それぞれ一つの洞窟をお選び下さい」

真「分かったわ。そうね・・・『投げ技の洞窟』とやらにするわ」

翠「翠星石は、『打撃技の洞窟』にするですぅ」

金「『関節技の洞窟』に決めたかしら」

？「バゴアッバゴアッ！」

真紅達が自分たちの進む道を選んだとたん、何処からか不気味な笑い声が聞こえた

真「何者！？」

真紅達が周りを見渡しても、その声の主らしき者はいない

そして、その声は真紅達に語りかけた

？「ようこそ我がフィールドへ・・・私が薔薇四天王の首領、薔薇将軍です♪」

第十八回　有利？不利？怪しい取引！！の巻

真紅達がそれぞれの洞窟を選び終わったとき、ついに宿敵、薔薇将軍の声を聞くことが出来た

その声は、金属か何かに反響した声だった　恐らく、鉄仮面のようなものを身につけているのだろうそれ故、たとえ一度聞いたことがある声であっても、気づくことは難しい

声だけで姿を見せない黒幕に対し、真紅達は憤りを感じていた

真「貴女が薔薇将軍？それなら姿を現したらどうなの？」

翠「そうですぅ！いつも影から薔薇水晶達を動かしておいて、自分はまだ隠れているつもりですか！」

金「このおくびょーものーっ！」

将「バゴアバゴアッ！・・・これはこれは失礼しました。言われてみれば、貴方たちお客様に対して不愉快な思いをさせてしまいましたね」

表面上はわびていても、内心ではまったく気にしていない・・・そんなことは、真紅達にとってわかりきったことだった

真「言葉だけの謝罪などいらないわ。形で表しなさい！・・・最も、今更どんなに謝られても、雛苺の誘拐を簡単に許すわけにはいかないけど」

将「バゴアバゴア・・・そうですか・・・そんなに第六ドールの妹が大事ですか？第五ドール真紅」

真「・・・」

将「いいでしょう。本来ならば、私たちとの戦いで勝利することが出来たら返そうと思っていましたが・・・」

将「せめてもの詫びとして貴方たちの目の前にある洞窟の何処かに置いておきます・・・四天王の内の一人と一緒にね」

真「・・・一見私たちにとって有利な相談ね」

金「目的の内の一つ、雛苺の奪回をこんなに簡単にこなせるかしら」

翠「でも、なんかひっかかるですねぇ・・・一体何を企んでいるですか！」

真紅達の言うとおり、この話はとても有利な話だった

第一目的である雛苺の奪回さえ出来れば、やむを得なく撤退することも出来るし、何より雛苺を人質にされる心配もない

だからこそ、この提案に何かしら罠があるかも知れないと真紅達は警戒せざるを得なかった

将「とんでもない！言ったでしょう？これは詫び・・・私たちにとって不利にはなっても有利にはなりませんよ」

将「それにご安心を・・・私たちの目的は第六ドール、雛苺の誘拐にあらず。失礼な言い方をすれば、アレはあなた達をおびき寄せる餌にすぎません」

真&翠&金「アレ！？」

誰もが今の発言に憤りを感じた

特に翠星石が怒りのこもった声で

翠「ぐぬぬ・・・ゆるさん・・・ゆるさんですぅ！」

と（何故か）薔薇水晶を睨みつけていた

薔「・・・」

ジ（・・・八つ当たりか）

将「クククアハハハ・・・バババゴアバゴア！」

薔薇将軍が、満足そうに笑い出す

将「怒った？怒りました！？それでいいんですよ！もっと・・・もっと憎んで下さい！この私をッ！」

翠「ぐぎぎ・・・」

翠星石、怒りで体が震えている

金「あわわ・・・翠星石がお・・・鬼のようなのかしらッ！」

翠「ええい！今すぐにでもお前の首をっ・・・」

真「落ち着きなさい、翠星石」

翠「うっ・・・真紅」

真「あれぐらいの挑発・・・受け流せてこそ気品あるレディよ」

翠「・・・分かったですぅ」

将（ふんっ余計なことを・・・）

将「アレと呼ばれても仕方がないとは思いませんか？ローゼンメイデンでありながら、ただの人形に落ちぶれているあの様を見て・・・一体何故ああなってしまったのでしょうね、第五ドール？」

真「貴女には関係のないこと。それより、この洞窟のどれかに雛苺がいるのは本当なのね？今更嘘でしたなんて言わせないわよ」

将「バゴアバゴア、その点はご安心を・・・私は嘘をつきませんので。でも・・・」

真「でも？」

将「最初に述べたように、洞窟の奥には私の忠実なる部下、「薔薇の四天王」が一人ずつ待ちかまえています。第六ドールを取り返したいのならば、四天王との戦いは避けられないですよ」

真「ご忠告感謝するわ・・・でも」

そういって翠星石、金糸雀を見る

真「私たち誰一人負けるとは到底思えないわ」

翠「返り討ちにしてやるですぅ！」

金「カナも頑張っちゃうのかしら！」

将「バゴア、バゴア！その自信に満ちあふれた表情が・・・絶望へと変わっていくのですねぇ♪バゴアバゴア、待ってますよ・・・（お姉様方）」

それきり、薔薇将軍の声は聞こえなくなった

第一九回～第二十一回

第十九回　突入、薔薇の茨道！の巻

薔薇将軍の声が消えた後、３人は互いの目的を確認しあっていた

真「私たちの目的は、雛苺の救出・・・でも、もう一つ」

翠「あの薔薇将軍のぶちのめす！ですぅ」

金「両方出来て、ミッションコンプリートなのかしら～！（ぶちのめすは言い過ぎだと思うけど）」

翠「ところで、この中の一人が雛苺を救出することになるですけど、その後はどうするつもりですか？」

金「安全策をとるなら、雛苺を救出した人は一度戻るのが得策かしら？」

真「そうね・・・敵の数によるわ。今分かっているだけで薔薇将軍、薔薇の四天王と5人。もし、たった5人であれば私たち3人が四天王の内3人を倒し、こちら側3人、敵側は2人と有利に持ち込めるわ。」

翠「そうなれば、私たち3人のうち1人が抜けても2VS2を維持できるですね。」

金「・・・でも、私たちは連戦を強いられるわ。例え四天王を倒すことが出来ても、強敵薔薇水晶や実力が未知数の薔薇将軍を倒すこ

とが出来るのかしら？」

金糸雀の的をついた意見に、少しの沈黙が訪れた

しかし、

真「大丈夫よ。私たちにとっても・・・薔薇将軍にとっても恐ろしい存在がいるわ。彼女が何とかしてくれる」

場所は変わって、病院

水「８０・・・８１・・・８２・・・」

水銀燈、自主トレをしている

め「ねえねえ、水銀燈？」

水「・・・８３・・・８４・・・８５・・・」

め「ねえってばぁ～」

水「・・・何よ・・・邪魔・・・しないで・・・くれる」

め「大事なこと聞きわすれていたんだけど」

水「９０・・・９１・・・９２・・・」

め「決戦の日っていつなの？」

水「９３・・・９４・・・・・・そうね・・・真紅たちにでも聞い

てくるわ」

め「もうとっくに過ぎてたりして」

水「この私が、そんなまぬけなミスするわけないでしょ」

水銀燈、トレーニングを終えジュンの家へと飛んでいった

め「ふふっ・・・あれで何処か抜けてる所があるのよね」

水銀燈が去った後、めぐが静かに笑っている

め「・・・あれ？こんな紙切れさっきまであったかしら？・・・何かのアドレス？」

一方、水銀燈はというと・・・

水「出来れば、奴らに会いたくはないわぁ・・・何とか知る方法はないかしら？」

ジュンの部屋の窓から侵入し、中に入る

水「・・・おかしいわね、真紅達の気配がまったくないわ。何処かに外出でもしてるのかしらぁ」

何か知る手だてはないか部屋の中をうろうろしていると・・・

水「こっ・・・これはぁー！！くんくんシリーズの限定ポストカードじゃなぁい！いいなぁ・・・一枚だけなら・・・」

と本来の目的を忘れ、こそ泥のような真似をしていた

その時

ガチャン

水「ひゃ！」

ちょうど扉を背にしていた水銀燈には、誰が入ってきたかすぐに知ることが出来なかった

おそるおそる振り返ってみると・・・

の「あら？真紅ちゃん達のお友達かしら？」

のりだった

水「ふぅ・・・」

一番この状況を見られたくない人物じゃなくて一安心した水銀燈

の「真紅ちゃん達なら、鏡の中に遊びに行っているわよぅ」

愛想の良い笑顔で水銀燈に話しかけるが、

水「鏡・・・nのフィールドね！案内しなさい！」

の（雰囲気が真紅ちゃんに似てるわね、この子・・・）

場所は戻って洞窟前

ついに、真紅達は洞窟へと入るところであった

真「ジュン、巴、私たちは行くわ」

翠「翠星石の勇姿、とくと見ておくですぅ！」

金「精一杯頑張るかしら！」

ジ「応援しているからな！無事かえって来いよ」

巴「雛苺を・・・お願い」

3人の勇敢なドールは、それぞれの洞窟に足を踏み入れる

真「待っていなさい・・・薔薇将軍！」

翠「絶対助けてやるですよ・・・雛苺」

二人は洞窟の奥へと歩いていき、姿が見えなくなった

金「・・・」

金糸雀、振り返りジュン達に話しかける

金「あのぅ」

ジ「ん？ぼくか？」

普段、あまり喋らないドールに喋りかけられ少し戸惑うジュン

金「お願いがあるの・・・みっちゃん・・・私のマスターにはこの戦いのことを黙っていて欲しいのかしら」

金糸雀の発言に当然驚くジュンと巴

ジ「おまえ・・・黙ってここまで来たのか？」

巴「そんな・・・もし、万が一のことがあれば・・・」

金「・・・」

金糸雀、微笑んで

金「その時は・・・みっちゃんに『今までありがとう、みっちゃんの卵焼きは今までで一番おいしかった』って伝えてくれるかしら？」

ジ「なっ何だよそれ！まるで遺言じゃないか・・・お前も真紅達と一緒に帰ってくるんだろ？なのに・・・」

巴「そうよ・・・無事帰ってきて、自分で伝えたら？」

金「・・・ふふ。やっぱり、真紅のマスターもヒナのマスターもみっちゃんに負けず優しい人ね。・・・ありがとう。」

そう言い残しにこっと笑うと、真紅達と同じように奥へと進んでいった

ジ「金糸雀・・・」

意味深な言葉を残した金糸雀

このときから、何か嫌な予感がジュンと巴の頭の中をよぎっていた

第二十回　招かざる？もう一人のお客様！？の巻

薔「全員、洞窟の中へ入りましたね・・・」

今までずっと沈黙していた薔薇水晶が、突然口を開く

そして

パチンッ

と指を鳴らし、自分自身は床に沈んでいきその場から消えてしまった

ジ「な・・・なんだ？一体何をしたかったんだ？」

巴「あ・・・洞窟が！」

先ほどまで開いていた洞窟の穴が、次第に茨で閉じていく

ジ「これでもう出られないってか・・・趣味の悪いことをするぜ」

巴「みんな・・・」

その時

ビューーーーン

ジ「うわっ！」

巴「きゃ！」

速い速度で何かがジュンと巴の間を横切った

水「私をおいて行くのは・・・許さないわよ！」

ジ「す・・・水銀燈！（そういえば忘れていた）」

水「あの穴か、・・・茨が邪魔ね。こういうときは・・・」

＞回想＜

め「一度　的を絞れば　あとは畏怖を捨て思いきりと勇気を持ち・・・

身は弩弓の様に　拳は箭の様に　回打し　敵を穿つーっ！・・・はい、言ってみなさい！」

水「やあよぉ・・・何でそんな長ったらしいださぁーい台詞をわざわざ言いながらやらなきゃならないのぉ？」

め「まだ羞恥心なんか持って・・・いいわ、じゃあやってみなさい」

水「ふん、私には加速力があるのよ。そんな木の柱くらい・・・粉々よ！」

水銀燈、両手を合わせ体を錐揉み上に回転し目の前にある木柱に突撃する

め「あっ、言い忘れてたけどその柱、中身鉄に変えておいたから～。つまりそれ鉄柱よ♪」

水「な・・・なんですってぇ！？」

水銀燈、バランスを崩しながら木柱に指から激突

水「いったぁーーーーい！（＞＜）」

め「あらあら、何？さっきの不細工なフォームは？」

水「あんたが突然あんなことをっ！って鉄なんて砕けるわけ無いでしょう！」

め「さっき言ったことは嘘よ」

水「う・・・嘘！？」

め「もし私の言ったことなんか聞こえないほど集中していれば、木柱ごとき粉砕できたはず・・・違うかしら水銀燈？」

水「ぐっ・・・それは」

め「それに、例え聞こえていても問題ないでしょ？もし、敵が鉄ぐらいの強度を持っていたらどうするの？鉄なんてどうせ無理だって言ってあきらめるの？」

水「うう・・・（うまく言いくるめられた気がするけど、確かに一理ある）」

め「さあ、私の言うとおりにやってみなさいよ、だまされたと思って、ね？」

水「わかったわよ・・・」

水銀燈、もう一度木柱の前に立ち全神経を集中させる

水（ええい、恥ずかしがるな！一回、一回キリで良いのよ！）

水「たあっ」

今一度、空中に飛び上がる

水「一度　的を絞れば　あとは畏怖（いふ）を捨て思いきりと勇気を持ち・・・」

水銀燈、体を矢のように直立させ技のフォームに入る

水「身は弩弓（どきゅう）の様に　拳は箭（や）の様に　回打し　敵を穿（うが）つーっ！」

バリバリバリッ！

木柱が粉々に砕け散った

め「よし！ほぼ私が教えた通りの見事な出来よ、水銀燈」

水「ふうっ・・・ま、最初の時も難なく出来てたけどねぇ」

め「もうっまたそんなこと言ってぇ～」

＞回想終了＜

水「ちょうどいいわぁ・・・一度　的を絞れば　あとは畏怖(いふ)を捨て思いきりと勇気を持ち・・・」

ジ「もしかしてあいつ・・・茨に突撃する気か！？」

巴「あ・・・あのフォームは！？」

水銀燈、体に回転をかけ茨に向かって・・・

水「身は弩弓(どきゅう)の様に　拳は箭(や)の様に　回打し　敵を穿(うが)つーっ！水銀(マーキュリー)削岩機(パルバライザー)！！」

ガリガリガリガリッ

ジ「すごい・・・幾重にも重なった茨が削られていく」

水「てやぁ！」

ドンッ

茨を削り終えた水銀燈、そのまま洞窟の中に入っていく

その後、茨は急激な速度で再生し何もなかったかのように元通りに戻っていく

ジ「無理矢理入っていった・・・あいつらしいな」

巴「あの子の入っていった洞窟ってたしか・・・」

ジ「・・・ゲッ、早速嫌な予感があたってしまったのか！？」

巴「招かざる客・・・彼女はどっちに対して有利に傾くのかしら・・・」

第二十一回　立ち塞がる四天王は名も無き人形！？の巻

場所は変わり、薔薇将軍のいる部屋

将「ばらすぃー・・・いや、ばらりんの方がいいかしら？」

薔「・・・」

将「どっちが愛称にいいか悩むわねぇ」

たわいもない考えに頭を悩ます薔薇将軍

そこへ、音もなく蒼星石が現れた

蒼「・・・将軍」

将「あらあら・・・何かあったのですか？お姉様から私に話しかけてくれるなんて」

蒼「いやいや・・・大したことないんだけどね。１人侵入者・・・いや、招かざるお客様が増えたことを伝えようと思ってね。お客をもてなすのが君のポリシーだったよね？」

将「バゴアバゴア・・・第一ドール、水銀燈お姉様ですか。彼女なら招かずとも来てくれると思っていました」

にやりと笑い

将「バゴアバゴア、全ては計算通りですよ」

蒼「そう・・・でも、お客様には変わりないんだろ？真紅達を出迎えるために3人だけしか準備していない」

将「・・・そうですねぇ、それは失礼に当たります。困った困ったぁ」

困ったといいながらも、満足そうな笑みを浮かべ続ける将軍

蒼「君の言いたいことは分かってるよ、僕が行けば良いんだろ？」

将「いえいえ、蒼星石お姉様はサプライズ・・・今出しては面白くないですわ。」

蒼「・・・まあ、どちらでもいいけど」

将「四天王の彼女らを信じましょう・・・最低1人に手負いぐらいおわせられるでしょう」

蒼「おやおや、随分小さな評価だね。期待してないのかい？」

将「バゴアバゴア、ローゼンメイデンシリーズが弟子の人形に負けるとは思えませんわ。同じローゼンメイデンの私とお姉様ならおわかりでしょう？」

蒼「・・・普通、味方の勝ちを望むものだけどね」

将「みかた？くくくっ・・・」

薔薇水晶、笑いをこらえて

将「もうっ・・・酷いですわお姉様！あまりの可笑しさにいつも通りに笑えなかったではないですか」

蒼「無理して使わなくてもいいと思うけど・・・そんなことより、別に僕は面白いことを言ったつもりはなかったんだけど」

将「だってですよ、お姉様。チェスや将棋で自分の駒を犠牲にしないで勝つことなんて不可能ですよ。」

蒼「・・・」

将「兵士（ポーン）や歩を犠牲にして初めて勝利することが出来る。彼女らには最低限お姉様方の技をたくさん受けてもらいたいですわねぇ。手負いをおわすことが出来ればもっと嬉しいわぁ」

非情なる薔薇将軍の考え、しかし間違ったことは言っていない

蒼星石は、将軍の冷酷なる知将ぶりを垣間見るのだった

蒼「薔薇水晶、君の妹たちがああ言われてるけど・・・」

先ほどから何も言葉を発しない薔薇水晶

蒼星石に話しかけられても何も喋らない

代わりに薔薇将軍が

将「無駄ですわ、お姉様。彼女は怒りもしなければ喜びもしない・・・悲しみさえもね」

蒼「・・・」

将「バゴア、でも私は彼女を気に入っていますわ。命令に忠実に従ってくれる部下・・・なんと素晴らしいのでしょう。この子は兵士達とは違う。」

何故、薔薇水晶を始めローゼンの弟子の作った人形が薔薇水晶の命令に従っているのか

蒼星石は、その謎を単刀直入に将軍に訊いた

蒼「・・・一体、何が彼女たちをそこまで？」

将「知りたいですか？バゴア、簡単なことですよ・・・（不気味な笑みを浮かべる）」

場所は変わり茨洞窟の中

歩いているのは真紅

真「奥からかすかな光が見えているのに、まったく近づいていないのだわ・・・」

先ほどからずっと歩き続けているのにもかかわらず出口に到達していない

真「・・・べべ別に暗闇が怖いわけじゃないけど・・・そろそろ到着しても良いころだわ！」

と、1人憤慨している

真「まったく、いつまで歩かせ・・・痛っ」

一転の光を頼りに歩いていたが、突然大きな壁にぶつかってしまった

真「そんな、こんなところで行き止まりだなんて・・・そういえば光も何処かへ」

左右を見渡しても茨の壁しかあらず

すると突然、真紅の真上から　ギギギィ　と何かが開く音がした

そこから、かすかに光が漏れてくる

真「上に来いってわけね」

周りの茨を踏み台にして上へ上へと登っていく

と、そこにはおもちゃやお菓子、お花などがたくさん並べられていた

真「そっそんな・・・ここは！？」

？「ようこそ、ローゼンメイデン第5ドール」

真「！？」

真紅を呼ぶ声の方へ振り返ると、そこには以前対峙したことがある、真紅と同じ金色の髪を持つドールが佇んでいた

？「初めまして、第五ドール・・・私を選んでくれたことに感謝します」

四天王の１人であるドールは丁寧な口調で喋る

真「貴女が四天王の１人ね・・・そんなことより、この場所は？」

？「８２６３３世界・・・お気づきのようですが、ここはローゼンメイデン第６ドールのフィールドです」

真「やはり・・・雛苺のフィールド！」

真紅は手を強く握りしめて

真「何故、ここが彼女のフィールドと繋がっているの！？いや、それ以前に何故このフィールドが存在して・・・」

？「簡単なことですよ・・・あちらを御覧下さい」

そう言って指を指した方向には・・・

真「雛苺！」

雛苺が玉座を思わせるような椅子に座らせられていた

？「第６ドールの存在が、このフィールドを具現化したのです」
真「・・・彼女がここにいるということは、ここが当たりのようね」
？「当たり？」
”当たり”という言葉に金髪のドールが初めて笑みを見せる
？「おかしな方ですね、私からすればここが”はずれ”ですよ」
真「あら、そんなに自分の実力に自信がおありなのね」
？「そんなことではないのですよ・・・まあいいでしょう、今度は第２ドールと第３ドールの状況をお見せいたします
そういって上空に指を指した途端、大きなモニターが二つ現れた
真「金糸雀！翠星石！」
そこには、真紅と同じように他の四天王達と対峙しているところだった
翠「その声は・・・真紅ですか！？」
金「あ！やっと真紅の姿が映ったのかしら」
二人の方からも真紅のいる場所が見え、声も聞こえる
真「二人とも、どうやら雛苺奪回は私の仕事になりそうだわ！」

翠「ということは、そっちに雛苺がいるですね？」

金「よかったぁ、真紅なら大丈夫かしら」

翠「翠星石じゃ危ないって意味ですかぁー？チビカナ！」

金「べっ別にそういう意味じゃあ」

？「第５ドール、通信は後１０秒で途切れます・・・何か言いたいことがあればどうぞ」

同じ事を向こうの四天王に言われたのか

翠「こら、もっと話させろです！」

と文句を言う翠星石

しかし、その相手の声は真紅には聞こえない

真「聞いて二人とも。どうやら、このままだと薔薇将軍と対峙するのは貴方たちが先になりそうだわ」

一呼吸入れた後

真「どうか無事で・・・」

翠「あっ真紅！」

プツン

そこでモニターの映像はきれてしまった

？「終わりましたね？では、向こうのリングへお上がり下さい、第5ドール」

二人はリングのある方向へと歩んでいく

真「モニターでお互いの連絡をさせてくれるなんて、やけに親切ね」

その親切という言葉に反応して、金髪のドールはまた笑みを浮かべる

？「”親切”？貴方たちからはそう見えるのですか？」

真「何か間違っているのかしら？確かにこの優遇は少し不気味ね」

？「いずれ分かりますよ第5ドール・・・いずれね」

そういって金髪のドールは先にリングインする

真「・・・前から不自然に思っていたのだけれど、私は真紅という名前があるの。一々番号で呼ばないでくれる？」

そういって真紅もリングイン

？「名前？ふふ・・・」

今度は”名前”という言葉に反応し声を出して笑った

？「名前とは便宜上ささいなもの・・・不便がなければわざわざ使

う必要もありません」

真「便宜上ささいなものであるところまでは同意だわ・・・でも、この名前はお父様から与えられた物、不必要ではないわ！」

？「・・・」

先ほどまで笑っていた顔が、今度は少し寂しげな表情になる

そして〝お父様〟とつぶやいた

真「貴女、自己紹介もまだしていないじゃない。貴女の名は？」

？「名前はまだもらっていません、名前があるのは、第1ドールのお姉様だけ」

真紅は少し驚く

真「名前がないですって？」

？「第2ドールの私を含め第3、第4はまだ名前をいただいていないのです」

真「・・・何故？」

？「〝愛〟」

真「愛？」

？「愛が足りないからです」

真「・・・そう、でも名前が無いと不便でならないわよ」

良い提案を思いついた真紅

真「貴女が名前をもらうまでの名前をつけてあげるわ」

？「貴女が？」

真「そうねぇ・・・第2ドールだから二（ツヴァイ）でどうかしら？気に入らないのなら他のを考えるけど」

二「二（ツヴァイ）・・・構いません。」

真「しばらくはその名前を使ったらどう？ちなみに、第3ドールは三（ドライ）、第4ドールは四（フィア）なんてどうかしら？」

二「よろしいと思いますよ。彼女たちに伝えておきます。」

真「簡単に受け入れてもらって嬉しいわ、二（ツヴァイ）」

好意的に話しかける真紅、しかし・・・

二「”受け入れる”？ふふ・・・可笑しい」

金髪のドール改め、二（ツヴァイ）が笑いをかみしめる

二「受け入れてあげているのですよ、第5ドール・・・いえ、真紅」

真「・・・あら、どういう意味かしら？」

二「もうすぐ分かりますよ・・・さあ、そろそろ始めましょう」

真紅、二（ツヴァイ）共に戦闘態勢に入る

二「私は、貴女に感謝しています・・・何故なら」

バッと前に飛び出す

二「貴女を倒せば、お父様は私を愛して下さるのですから！！」

真「！？」

カーンッ

試合開始のリングが鳴る

真紅　ＶＳ　二（ツヴァイ）

第二十二回～第二十四回

第二十二回　試合開始！投げ技の試練、真紅ＶＳ二！の巻

時は少しさかのぼり、真紅　ＶＳ　二（ツヴァイ）の試合開始５分前

ジュンと巴は、ジュンの家へと戻り、早速渡されたＵＲＬを入力しアクセスした

ジ「なんだこの風景？何処かのカメラの映像みたいだな」
巴「この場所・・・見覚えがある、雛苺と一緒に来たことがあるわ」
カメラが真紅と二（ツヴァイ）を映す
ジ「真紅だ！それと・・・あの人形、見覚えがあるぞ」
巴「薔薇の四天王と名乗っていた１人だわ」
２人が映し出されている映像について喋っていると・・・
映像にテロップが流れた
『実況をお願いします　ポケットの中から小型マイクを取り出して下さい』
ジ「小型マイク？うあ！いつの間に・・・」
ジュンと巴がポケットの中を確認すると、いつの間にか小型マイクが入っていた
巴「これ・・・ちゃんと使えるのかしら？」
ジ「試してみよう　お～い、聞こえるかぁ？真紅―！真紅―！」
ジュンがマイクのテスト中に、試合開始のゴングがなる

真紅――！

真「ジュン！？」

聞き覚えのある声を聞き、とっさに後ろを振り返る真紅
真紅に突進していた二(ツヴァイ)がその隙を見逃すはずもない
二「余所見は禁物ですよ！」
バシンッ
真「ぐっ・・・」
二(ツヴァイ)のパンチが真紅の背中をとらえる

ジ（たっタイミングの悪いときに呼んじゃった・・・）
巴「あ――――――っと！二(ツヴァイ)、余所見をしている真紅に対し不意打ちパンチだーっ！」

真「今度は巴！？」
二「言い忘れていましたが、貴女のマスターとその連れの方は、この試合を御覧になっているのです」
真「二人とも、見ていてくれるのね」
二「本来なら実況の声のみ流れるはずでした・・・この試合を見ているのは他にもいらっしゃいますからね。出来れば実況以外の私語は慎んでもらいたいところですが」
真「他にも？ふん、まあいいわ。ジュン達が見ているのなら手は抜いてあげられないわね」
二「くくっ・・・ご冗談を」
真「今度はこちらから行くわよ！てあっ」
ガシッ

巴「あ――――っと、まずは力比べ、両腕でのハンドシェイクだ――――っ！」
ジ「（さっき微妙に怒られたな）力は五分五分といったところか・・・」
真「ふん、そんなものなの？私はまだフルパワーじゃないわよっ！

ふんっ！」
真紅が力を入れたことで、少しずつ二(ツヴァイ)が後退していく
真「どうかしら？これで・・・どう！？」
真紅が再び力を加えたその瞬間
二「（ニヤッ）かかりましたね」
真「なっ」
二(ツヴァイ)、右腕の手を離し両手で真紅の右腕を素早くつかみ自分の肩にのせる
二「せいっ」
ドォン！
真「ぐはっ」
真紅、まるで自分が魚で釣られるように一回転し、マットに叩きつけられた

巴「こっ・・・これは一体どうしたことでしょう！？先ほどまで力比べをしていたはずの二人が、あっという間に二(ツヴァイ)が真紅をマットに叩きつけてしまったぁ――――！」
ジ「これは・・・一本背負い！柔道の技だ！」
巴「一本背負い？でも、柔道の技には決まった型があるはずじゃ」
ジ「この一本背負い、技の入り方はオリジナル・・・相手の拳をアームブレーカーの形で肩に乗せ、そこから普通の一本背負いへと連絡している！」
巴「なるほど！つまり、この一本背負いは対レスリング用へと改良しているわけですね」

真「うっ・・・まさか、この私が先にマットに寝ることになるなんて・・・」
二「まだ終わってませんよ！」
すかさず仰向けに倒れている真紅の右腕をつかみ、腕ひしぎ十字固めを仕掛ける

真「くっ、そうはさせない！」
伸ばされそうになった右腕を、すかさず左手でつかみクラッチする
巴「あ――――っと！今度は腕ひしぎを仕掛けようとする二（ツヴァイ）、しかし
真紅が何とか左手でクラッチすることに成功する――――っ！」
ジ「危機一髪・・・何とか腕を守れたか」

真「腕ひしぎ十字固め・・・簡単な割に強力な破壊力を持つ関節技」
二「・・・」
真「それ故、腕十字の警戒は怠らないわ・・・つねに防護策は完璧
なのよ・・・残念だったわね」
二「完璧？ふふっ・・・完璧とはそんなに安易な言葉でしたかしら」
二（ツヴァイ）、腕ひしぎ十字固めをとき立ち上がる
二「まあ、ここまでガードを固められてはこの技は無理でしょう」
真「偉そうなことを言ったわりに素直なのね」
真紅もほぼ同時に立ち上がる

巴「さあ―両者ほぼ同時に立ち上がり、再びふりだしの形へとなっ
たぁ―」
ジ「どうやら二（ツヴァイ）って奴、柔術を身につけているな」
巴「先ほどの一本背負い、腕ひしぎ十字固めですね」
ジ「そうそう。でも、残念ながらさっきの一本背負いは真紅には大
して効いてない。」
巴「効いてない？あれほど豪快に背中から着弾したのにですか？」
ジ「もしあの場所が畳などの堅い床なら相当なダメージだっただろ
うけど、あそこは比較的柔らかいマットの上。だから、柔道の床に
叩きつける投げ技は効果が薄いんだよ。」
巴「なるほど！マットの柔らかさが衝撃を吸収してしまうわけです
ね」
ジ「投げ技は大丈夫、後は関節技、絞め技などに気をつけないとな」

真「ジュンが言ってるように、はっきり言ってさっきの投げ技効いてないわ。ジュードーが得意なら、もっと堅い床を用意しておくべきだったわね」
真紅が勝ち誇ったような顔で言うが
二「ふふっ・・・おかしい」
二(ツヴァイ)はまったく動じない
二「お忘れですか？ここが何の試練であるかを・・・」
真「ふん・・・勿論よ」

ジ「試練って・・・たしか3人が入っていったそれぞれの穴の名前が“投げ技”、“打撃技”、“関節技”だったような・・・。真紅が入っていったのは“投げ技”の洞窟！」
巴「薔薇将軍の言ったことが真実なら、彼女・・・二(ツヴァイ)は“投げ技”を得意とすることになるわね」

真「勿論、覚えているわ。貴女は投げ技を得意とするのよね。実際さっきのジュードーにはびっくりしたわ。でも・・・」
真紅は足でマットを二三回踏みながら
真「このマットじゃ貴女の得意な投げ技を生かすことができないわね」
・・・と挑発するような仕草をみせる
二「ふふっ・・・案の定、まだ理解していないようですね。」
二(ツヴァイ)、呆れ口調で
二「いいでしょう、分からせてあげましょうか」
真紅に向かって低空タックルを試みる二(ツヴァイ)

巴「お――――っと！またしても二が先に仕掛けたぁ――！」
ジ「あいつ、また先手をとられて！」

真「読んでいたわ！」
真紅、低空タックルがくることを予測し、がっちり二（ツヴァイ）を捕まえる
二「！？」
真「今度は私の番よ！」
真紅、二（ツヴァイ）をしっかりとつかんだまま、徐々に空中へ持ち上げる

巴「あ――――っと！低空タックルを先読みしていた真紅！そのままがっちりと抱え込みながら持ち上げるぅ――！！」
ジ「けど、投げ技は効きにくいはずだぞ！どうするつもりだ」

真「背中から受け身をとることが安易な技なら意味がない・・・ならば！」
真紅、二（ツヴァイ）を逆さ向きに抱え込んだまま大きくジャンプ
真「頭から着地させる！！」
両膝で二（ツヴァイ）の頭を固定
真「S・ドライバー（真紅ドライバー）！」
ドゴォン

巴「決まったぁ――――！二（ツヴァイ）の頭がマットに激突ぅ――――！見事なパイルドライバー・・・いえ、S・ドライバーです」
ジ「考えたな真紅、いくらマットでも頭から食らえば相当なダメージになるぞ！」

二「・・・流石・・・やりますね」
真「まだまだこれからよ！」
うつぶせに横たわる二（ツヴァイ）に起き上がる隙をあたえず、馬乗りになる
そして、なにやら複雑な関節技を二（ツヴァイ）にかけていく

ジ「なんだ？あの真紅の技は？」
巴「なにやら複雑な技を仕掛けている真紅ですが・・・もしやあの

技は！」

真「足はこれで完成！そしてこれで全てが完成よ！ＳＴＦ！」

二「う・・・ぐ・・・」

巴「決まったぁ――――！ＳＴＦ（ステップオーバー・トゥー・ホールドウィズフェイスロック）だぁ――――！」

第二十三回　隠されし能力、驚異のメタモルフォーゼ！の巻

巴「ＳＴＦ・・・二種類の異なる技同時にかける高難易度技。そして、この技のもっとも恐ろしいところ・・・それは」

ジ「あっ二（ツヴァイ）が技をはずそうとしている」

ニ（ツヴァイ）、足のトゥー・ホールドを力任せに外そうとするが・・・

二「！？」

逆にフェイスロックの威力が増してくる

巴「この技の恐ろしさ・・・それは、フェイスロックをはずそうとすればその反動でトゥー・ホールドが、逆にトゥー・ホールドをはずそうとすればフェイスロックがそれぞれよりきわまることにある」

ジ「へぇー、真紅の奴やるじゃん！」

巴「恐らくこれで決まりです」

真「無駄よ二（ツヴァイ）、こんなにうまく決まってしまっては、この技から逃れるのは不可能・・・ギブアップしなさい」

二「・・・」

真「そう、なら仕方ないわね！」

さらに技に力を入れる真紅
二「ぐぅ・・・」
真「さあ、このままでは背骨が折れてしまうわよ！」
二「ぎ・・・」

巴「どうやらギブアップのようですね」
ジ「よし、これで一勝だ！」

――カツン
――コツン

真紅の勝利が確定したと二人が思ったその瞬間、何者かがリングへと近づいてきた

ジ「あれは・・・」

――カツン
――コツン

ハイヒールの音がリングに近づいてくる
真「あなたは・・・」
二「おっ・・・お姉様！」

薔「・・・」
その正体は、薔薇水晶
リングの側まで近寄り、二（ツヴァイ）を見つめている

二「薔薇水晶お姉様・・・もっ申し訳ありません！このような無様な姿を晒してしまって」

薔「・・・第二ドール、私の可愛い妹」
二「はい」
薔「・・・“目的”の達成、それが私たち姉妹の使命・・・それを忘れないで」
二「心得ております」

――カツン
――コツン

再び去っていく薔薇水晶
真「待ちなさい薔薇水晶、“目的”とは一体・・・」
薔「・・・」
何も言わず、その場から消える
二「お姉様、ありがとうございます。私は“目的”のため・・・負けるわけにはいかない」
真「いくらやる気になってもこの技から逃れることは不可能よ」
真紅のＳＴＦがより二（ツヴァイ）を締め付ける
二「あまり使いたくなかったのですが・・・そうも言ってられませんね」
真「？」

二「メタモルフォーゼ『部位軟体化』！」

真「あら！？」
二（ツヴァイ）の足が真紅のトゥー・ホールドから抜ける
真「そんな、私の技は完璧だったはず！？」

巴「あ――――っと！どうしたことか、あんなに完璧だったトゥー・ホールドが突如破れたぁ――！」

二「足が抜ければこちらのもの・・・」
二（ツヴァイ）、素早く立ち上がり背中の真紅の襟首を掴む

ジ「背負い投げの姿勢だ！」
巴「あ――――っと！二（ツヴァイ）、背負い投げを仕掛ける！」

二「ただの背負い投げでは終わりませんよ！」
二（ツヴァイ）、背負い投げから更に技を仕掛ける
二「背負い式パイルドライバー！」
ドスンッ――！
真「がはぁ！」

巴「なっなんと、背負い投げから直接落ちてくる相手の頭を両腿にはさみパイルドライバーを仕掛ける超人技だぁ――――！真紅、頭からもろに着弾、これは相当なダメージだぁ――！」
ジ「なっなんて技なんだ・・・柔道とプロレス技の複合技なんて、見たことない！」

二「立って下さいよ、真紅。せっかくメタモルフォーゼをしたのですから」
真「うぐ・・・」
真紅、ゆっくりと立ち上がる
真「そういえば、私の技から抜ける直前変なことを口走っていたわね・・・」
二「そうです、今の私は部位を軟体化させることが出来るのです」
真「軟体化ですって！？」
二「ご存じですか？柔道でもっとも必要な能力、それは力では無く体の柔らかさ・・・。私の持つ部位軟体化能力と相性がとてもいいのです。」

ジ「そうか、だから柔道を技にしていたのか」
巴「今明かされる、二(ツヴァイ)の能力！真紅は一体どう立ち向かうのでしょうか！」

二「“柔よく剛を制す”、この言葉通り私は貴女を倒します」
真「いいわ・・・そろそろ、この戦いに決着をつけてあげるのだわ！」
真紅、相手に向かってチョップを仕掛ける・・・が
二「ふふふっ・・・無駄です」
二(ツヴァイ)にまったく当たらない

巴「真紅、二(ツヴァイ)めがけてチョップの嵐、しかしまったく命中しておりません！」
ジ「もしかして、さっきのパイルドライバーのダメージがまだ・・・」

真「てやぁ――――！」
モーションの大きい真紅の逆水平チョップは見事に空振り
そこにすかさず
二「ボディががら空きですよ」
低空タックルを試みる二(ツヴァイ)

巴「あ――――っと！隙が大きいチョップがはずれ、二(ツヴァイ)が低空タックルだぁ――！」
ジ「何やってるんだ！あれじゃあ攻撃してくださいって言っているようなもんだよ！ん？・・・そっそうか！」

真「かかったわね！」
真紅、二(ツヴァイ)のタックルをまるで分かっていたかのようにチキンウィングにとらえる

ジ「そうか、さっきの攻撃はチキンウィングにとらえるまでの布石！」
巴「真紅、チョップを囮に二（ツヴァイ）をとらえたー！」
二「なるほど・・・先ほどのチョップは囮でしたか。しかし、たかがチキンウィングごときどうってことありませんがね」
真「ふふふっ・・・残念ね、二（ツヴァイ）、このチキンウィングは私の必殺技（フェイバリットホールド）への布石なのよ！」
巴「あ――っと！真紅、必殺技予告だぁ！」
ジ「あいつ、そんなのできるのか！？」
真「ＳＴＦのときに降参していればよかったものの・・・痛いけど、覚悟しなさい！」
二「・・・」
真「“両腕の絡みを強固にして　大地の巨木を引き抜く心構えで敵の体を高く差し上げる”」
二「この技！？」
真「そして、“高く鷹の如く舞い上がる”」
巴「真紅、二（ツヴァイ）を抱えたまま空中に飛び上がったぁ――！」
真「“宙で敵を独楽（コマ）の如くに回転させ両大腿（りょうだいたい）を押さえ体の自由を封じる”」
巴「こっこの技は・・・もしかして！」
ジ「あのキン肉バスターだとぉ！！」
巴「これは驚き！真紅、あの高難易度技、キン肉バスターを仕掛けている――！」

真「早とちりしてもらっては困るわ、“更に両首のフックをより強力にするため、己の髪で相手の両首を縛り上げる”」

巴「し・・・失礼しました！この技はキン肉バスターではありません！」

ジ「ああ、真紅のツインテールが二（ツヴァイ）の首に巻き付いていく！」

真「このまま勢いよく敵をマットに叩きつければ完成！」

巴「真紅、二（ツヴァイ）を抱えたまま勢いよくマットに落下していく――――！」

真「首・背骨・腰骨・左右の大腿部の五カ所が粉砕される！オリジナル必殺技！」

二「・・・」（小言で何か呟く）

真「真紅バスターッ！！！！」

ズド――――ン

巴「今マットに着弾！真紅バスターが決まったぁー！」

第二十四回　破れた必殺技、敗北の危機！？の巻

巴「真紅のオリジナル必殺技、今炸裂！角度、技のフォームと共に完璧だぁ――――！」

ジ「・・・何だ？真紅の様子がおかしいぞ？」

第三者から見た真紅の必殺技は成功したように見えた

しかし・・・

真「そんな・・・一体どうして！？」

真紅本人は青ざめている

巴「お・・・おっと？技は完璧に決まったかに見えましたが、真紅の様子がおかしいですね」

ジ「どうしたんだ？一体何があったんだよ、真紅！？」

真「・・・技の衝撃がない、いつも技が決まったときに私が感じる体を突き抜ける衝撃がないのよ」

ふふふ・・・

真「！？」

真紅の耳元から笑い声が聞こえる

二「素晴らしい必殺技でした真紅、危機一髪でしたよ」

逆さ状態になったままの二（ツヴァイ）、真紅に話しかける

巴「な、なんと！ＫＯ（ノックアウト）確実だと思われていた二（ツヴァイ）でしたが、まるで平気のようです！」

ジ「そんな馬鹿な！」

真「く・・・そんな・・・私の必殺技が失敗したなんて」

二「ふふふ、必殺技を破られたときのショックは、貴女のようにプライドの高い人ほど大きいでしょうね」

真「ぬっぬかしなさい！私の・・・私の必殺技が破れるはずないのだわ！！」

ジ「ま、まさかあいつ・・・また真紅バスターを！」

巴「あ―っと？真紅、破れた必殺技をもう一度仕掛けようとするのか？」
ジ「止めろぉー真紅！冷静になれぇ！」
真「ふふっ、大丈夫よ・・・今度こそ大丈夫・・・幸い、この状態でもう一度上に高くジャンプすれば！」
巴「お―――っと！真紅、もう一度技を仕掛けるため上空へと飛び上がったぁ―！」
二「・・・やれやれ、相当技を破られたのがショックのようですね」
真「だっだまりなさい！」
二「もっと頭がきれると思いましたのに、残念です」
真「減らず口を叩いているといいわ、これでこの勝負を終わらせる！」
真紅、できるだけ高く飛び上がり、今ゆっくりと下降していく
真「今から下降するわ！これで終わりよ、二（ツヴァイ）！」
二「・・・そうですね、これで終わりですね」
真「ふん、今更認めても遅いわ」
二「冥土の土産に教えてあげましょう、私が何故あの技をくらわなかったのか」
真「・・・」
二「この真紅バスター、もといキン肉バスター系は確かに協力。くらえば首・背骨・腰骨・左右の大腿部の五カ所が粉砕されるでしょう」
真「そう、それがこの技が必殺技である所以よ」
二「では、一番最初に衝撃がいくのは何処か？」
真「最初に衝撃？それは勿論首なのだわ！その首の衝撃から体のあちこちに衝撃が渡る」
二「そう・・・つまり、逆の言い方をすれば、首さえ衝撃を受けな

ければこの技は失敗するのですよ！」
巴「お――――っと！二（ツヴァイ）の口から今明かされた真紅バスター破り！」
ジ「あの短時間であんなに細かい分析をしたというのか！？なんて奴なんだ！」

二「貴女が地面に着地する直前、私は頭を浮かせ衝撃がくるのを防いだのです」
真「そっそんな・・・でも、首は私の髪で固定したはず！それが何故・・・」
二「所詮、髪は髪・・・少しなら首を動かすことぐらい可能でしたよ」
真「うぐ・・・し、しかし今回は絶対に、逃がしはしないのだわ！」
前回よりをホールドをがっちりする真紅
二「一度破られた技を使用するのは自殺行為ですよ？」
真「黙りなさい！くらえ、真紅バスター！！」
二「いいでしょう、今度は私も、前より素晴らしい真紅バスターを見せてあげます！」
二（ツヴァイ）、体を顔と腿がくっつくほど深く曲げる
真「なっ！？」
二「私の部位軟体能力、忘れたわけではないでしょう？」
その際、首に巻き付いている真紅のツインテールを両手で引っ張る
真「痛っ！か・・・髪が！？」

ジ「うわぁ！あれ！見てくれ！真紅と二（ツヴァイ）の位置が逆に！」
巴「なんという光景でしょうか！技をかける前は上に二（ツヴァイ）、下に真紅だったのですが、いつの間にか逆になっております！」

二「真紅バスターの弱点、それは貴女の自慢のツインテールです！！」

真「か・・・髪に引っ張られて体の位置が逆に！？」
二「それでは貴女のおっしゃったとおり・・・これで終わりですね？」
真「あっ・・・そ・・・そんな」
二「高さも申し分ない・・・これなら私の技も威力が増すでしょう」
巴「あの体勢は、脳天破壊のブレーンバスター！？」
ジ「そっそんな！普通のブレーンバスターの高さはせいぜい自分の身長ぐらいなのに！？」
二「ブレーンバスター・・・いや、この高さはまるで山のよう・・・ならば、こう呼びましょう！」
二「マウンテン・ブレーンバスター！！」
ズド――――ン
巴「二（ツヴァイ）のマウンテン・ブレーンバスター・・・今被弾、真紅脳天直撃だぁ――――ッ！！」
真「がはっ・・・」
真紅、キャンパスに突き刺さり、ゆっくりと倒れる
二「もうしばらく目を覚ますことは無いでしょう・・・」
巴「・・・真紅、完全失神です。これにより二（ツヴァイ）の勝利が確定しました」
ジ「おい！嘘だろ！起きろよ真紅！起きろぉ――――！」
ジュン、必死に真紅に呼びかける
真（あぁ・・・この感じは意識を失う感じ・・・ちょうどネジがき

れるのと同じ感覚ね）
真（ジュンの声がうっすらと・・・消え・・・て・・・・い・・・・く）
二「・・・試合終了のゴングをお願いします」
巴「・・・私がやった方がいい？」
ジ「ううっ・・・畜生！畜生！」

その頃の真紅
真「・・・あら、ここは何処かしら？」
気絶した瞬間、真紅は別のところで目を覚ました
真「・・・誰かの世界かしら？」
真「なんだか薄暗い部屋・・・」
真紅がそう呟いた瞬間
？「デモ・・・心地ヨイ」
真「！？」
声が聞こえた背中の方を見る真紅
しかし誰もいない
それにもかかわらず
？「私ノ名前ハ・・・ローゼンメイデン第５ドール・・・真紅」
真「何を馬鹿なことを・・・出てきなさい！」
？「貴女コソ何故ココニイルノ？」
真「私？・・・私は確か・・・そうだわ！必殺技を破られて・・・負けてしまったのだわ」
？「ソウ、貴女ハ必殺技ヲ見事ニ破ラレタ・・・デモ、マダ負ケテハイナイ」
真「・・・どうせ私は気絶しているんでしょ？負けは時間の問題よ！それより貴女は誰！？」
？「私ノ名前ハローゼンメイデン第５ドール真紅」

真紅、呆れた様子で
真「あらあら珍しいわね、私もローゼンメイデン第5ドールで名前は真紅なのよ！変な冗談はよして！ただでさえいらいらしているのに！」
？「冗談デハナイ・・・私モ貴女モ真紅」
真「・・・そう、ならいいわ！姿をお見せなさい、真紅！」
？「私ナラココニイルワ、貴女自身ノ中ニ」
真「私自身の中！？」
？「ソコノ布ガ被サッテイルモノハ鏡、ソノ鏡ヲ見テミナサイ」
真紅が目の前にある布をはぎ取ると・・・
真「・・・私がうつって・・・あれ？」
？「気ガツイタ？私ト貴女ノ違イ」
真「あ・・・ああ、あのマスクは！？」
？「ソウ、貴女ノヨク知ッテルマスク・・・名前ヲ“マッドネスマスク”」
真「マッドネスマスク・・・狂気の仮面」
？「鏡ニハ本来自分ト同ジ姿ガウツルモノ・・・私ハ、貴女ト同ジニナリタイ」
真「どういう意味？」
？「私ト貴女・・・本来同一ノ存在ガ、コウヤッテ別レテシマッテイル・・・タッタ一ツノマスクガアルカナイカノ違イダケデ」
真「私にマスクをかぶれと言うの！？嫌よ！何か・・・記憶に残っていないけど、何か嫌な思い出がこのマスクにあるの！」
？「嫌ナ思イ出？」
真「思い出せない・・・でも、私はこのマスクを一度かぶったことがある・・・そして、何か事件が起こったはず・・・」
？「デモ貴女ハマスクヲ捨テナカッタ」
真「！？」
？「何故カ・・・ソレハ貴女ガ一番ヨク知ッテイル」
真「・・・“魅力”」

？「ソウ・・・ソノマスクハ貴女ガ一番欲シイモノヲ手ニ入レテクレタ」
真「・・・私の・・・欲しい・・・もの」
？「誇リ高キローゼンメイデンノ中デモ優秀ナ貴女ガ何故コンナトコロデハイツクバル必要ガアルノカ？」
真「・・・そうよ、何故この私が？この私が他のドールより劣るはずがないわ！」
？「何故アノドールニ負ケタノ？私ハ何故負ケタ？」
真「何故なの？力が足りなかったから？」
？「ソウジャナイワ・・・確カ最初ノ力比ベデハ私ノ方ガ強カッタノダワ」
真「それなら何故？そうか！知恵だわ」
？「ソウ、試合ニオケル知恵ハ確カニ向コウノ方ガ上ダッタノダワ・・・デモソレダケジャナイハズ」
真「力・・・知恵・・・もう一つ必要なはず・・・それは・・・友・・・」
？「違ウ！！ソレハ狂気！非情サヤ無慈悲ナ心ヲモツタメ私ハ狂気ヲ持タナケレバナラナカッタノダワ！！」
真「きょう・・・き・・・そうだわ、狂気・・・」
？「手ニ入レラレル！コノマスクヲカブレバ・・・無慈悲ナ力、非情ナ知恵・・・ソシテ狂気ヲ！！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8992c/

Rozen Maiden　alice wrestling

2010年10月9日03時23分発行